昭和48年12月

秋田県文化財調査報告書第29集

鹿角市・小坂町大規模農道発掘調査報告書

秋田県埋蔵文化財センター

秋田県教育委員会

序

鹿角大規模農道建設工事が実施されたが，鹿角市花輪から小坂町に至る延長15.1㎞の農道予定路線地区内には周知の遺跡が６ケ所存在していた。47年度に１部発掘調査を終了していたが，今回は風張地区を除いた４遺跡について発掘調査を実施しました。

２次にわたる調査で一応予定路線内の発掘調査は終了し，記録保存することになりましたが，今後道路工事が進むにしたがって新しい遺跡が発見される可能性もあり，その取扱いについては慎重を期す必要があります。

ともあれ，本書が関係者の参考になれば幸いであります。

おわりに調査を担当された各調査員，関係の皆さん，ご協力をいただいた鹿角市教育委員会，鹿角農林事務所土地改良課，陸上自衛隊秋田駐とん地第21普通科連隊の方々に深甚の謝意を表する次第です。

昭　和　48　年　12　月

秋田県教育委員会

教　育　長　　山　本　　一

目　　次

序　　秋田県教育委員会教育長　山　本　　一

凡　　例

Ⅰ　序　　文 …… 2

Ⅱ　鹿角大規模農道遺跡分布調査について …… 2

A　路線の地理的条件 …… 3

B　分　布　調　査 …… 4

C　遺　　跡 …… 5

D　結　　論 …… 6

Ⅲ　発　　掘 …… 7

A　発掘調査団の構成 …… 7

B　調　査　日　誌 …… 8

C　各発掘調査区とトレンチ(グリッド)の設定 …… 10

Ⅳ　遺　物　と　遺　構 …… 13

Ⅴ　考　　察 …… 24

Ⅵ　総　　括 …… 24

図・図版目次

PL 1 (上) 丸館表住居跡の陥込み南東より (下) 丸館表住居跡南より北側路線 26

PL 2 (上) 住居跡内の土器出土状態 (下) 南東より北側予定路線 27

PL 3 (上) 住居跡内の ③ の溝 (下) 北側より南側予定路線と ⑤ ⑥ の溝 28

PL 4 (上) 丸館表住居跡南西より (下) 丸館表 ⑥ r字状溝 29

PL 5 (上) 下草木第5発掘地点 (下) 仝 北側の溝状の陥込み 30

PL 6 (上) 第6地点餅野前年発掘住居跡上方は長野 (下) 餅野E 1グリッドの柱穴と溝を北より 31

PL 7 (上) 餅野W 1グリッド南より (下) 餅野E 1グリッド北より 32

PL 8 (上) 餅野CW隅のピット出現南より (下) 仝 ピット西より 33

PL 9 (上) 餅野CWピット発掘南より (下) 餅野住居跡より出る溝北西より 34

PL 10 (上) 餅野S 1・S 2ピット掘込み前西より (下) 餅野S 1・S 2ピット南より 35

PL 11 (上) 餅野住居跡より出る溝北東より (下) 餅野CWのピットと住居跡 36

PL 12 (上) 餅野E 1・W 1グリッドのアゼ取除き西より (下) 餅野発掘現場より長野をのぞむ南より 37

PL 13 (上) 餅野南方予定路線切通し北より土層面 (下) 仝 切通しにあるピット断面東より 38

PL 14 餅野Cグリッドの昨年発掘の土師器住居跡の内部及び集辺の状況 39

PL 15 前年度発掘出土土器餅野出土 (1－13) 草木出土 (14～17) 40

PL 16 丸館表遺跡出土土師器・須恵器 (MO－1～MO－9) 〃 凹石 (MO－10～MO－11) 41

PL 17 餅野遺跡出土土器 (M－1～M－17) 42

PL 18 餅野遺跡出土土器 (M－18～M－32) 43

PL 19 (上) 餅野出土の土師器・須恵器 (M－1～M－4) (下) 餅野出土の石器 (M－1～M－6) 44

PL 20 調査後発掘の宮戸式後半期の土器の一部 45

Fig 1 鹿角大規模農道路線と×印発掘地点 (北部は省略) 1

Fig 2 丸館表遺跡発掘全体図 (折込み)

Fig 3 餅野遺跡発掘全体図 (折込み)

Fig 4 丸館表出土土師器・須恵器 12

Fig 5 (上) 餅野土師器竪穴実測図 (下) 竪穴土層図 15

Fig 6 餅野竪穴出土土師器 18

Fig 7 餅野遺跡出土遺物 (1) 21

Fig 8 餅野遺跡出土遺物 (2) 22

Fig 9 餅野遺跡出土遺物 (3) 23

Fig 10 餅野遺跡出土の遺物 (4) (CW隅の石器) 23

例　　言

1　この報告書は秋田県教育委員会が実施した，鹿角市及び鹿角郡小坂町にわたる鹿角大規模農道の遺跡発掘調査の結果である。

2　報告書の執筆は５人の調査員のうち三名がこれにあたった。

3　この印刷は大館市で行なった。

4　写真撮影は，小山純夫による。

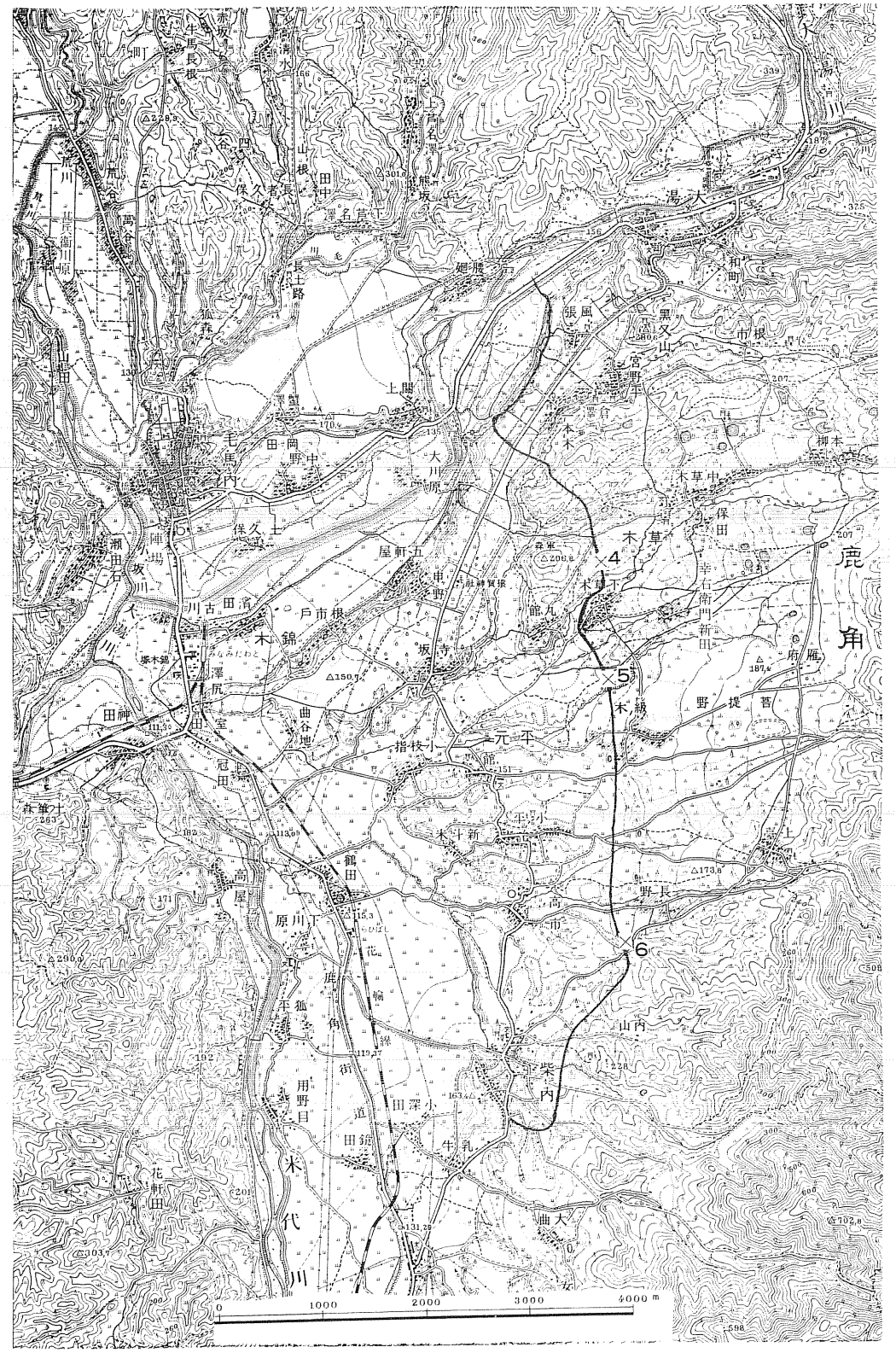


Fig 1　鹿角大規模農道路線と×印発掘地点（北部は省略）

Ⅰ 序　　文

鹿角大規模農道の工事は昭和46年から始まり，その一部について，昭和47年７月に「秋田県鹿角大規模農道遺跡分布調査団」による調査が行なわれ，その調査結果は次の第Ⅱ章に明らかである。昭和48年７～８月にかけて行なった同遺跡の発掘調査の結果については，第Ⅲ章以下に報告の通りである。

鹿角大規模農道の工事の特色は，比較的高い所を通り，その路面を削平し，その余分な土で田や湿地を埋めるという特色があるので，発掘調査は，削平される部分のみについて行なわれた。発掘調査の地点はⅡの「鹿角大規模農道遺跡分布調査について」に従って行なったが，鹿角市大湯風張台地については，国の特別史跡「大湯環状列石」の近くを通り，且つ土地の買収が全く行なわれていなかったので，別に予算を組み実施することにし，これを除外した。

（発掘責任者）　秋田県教育長・山本　一，（発掘担当者）奥山　潤，発掘調査員，高橋昭悦・小山純夫・福原和虎・田中修造・佐藤寛直，（事務担当者）門間光夫（県教育委員会）・柳沢兌衛（鹿角市教育委員会），発掘補助員，秋田県立大館桂高校社会部（15名），仝大館商業社会科研究クラブ（６名），仝大館鳳鳴高校社会部（16名），仝十和田高校社会科研究同好会（13名），仝花輪高校有志（２名），以上補助員（52名），陸上自衛隊秋田駐屯地第21普通科連隊，進藤恵一二曹，加藤勇士長，池田林一士長，高橋信行士長，内田英雄士長，根本秀彦一士，占部保亀二曹，長沢正三曹，佐々木二三夫士長，野呂政嘉士長，東海林均士長，小笠原茎一士長（以上二班，12名），炊事係，十和田高校（６名）。

Ⅱ　鹿角大規模農道遺跡分布調査について(1)

調査員　大　里　勝　蔵
〃　菅　原　　洋
〃　奥　山　　潤
補助員　県立十和田高校社会科研究同好会

この報告書は，昭和47年７月より実施した調査結果に関する報告である。農道工事の一部は，調査開始以前の昭和46年中から始められ，完成している。

路線の計画線の通過する地域は，遺跡発見事情の特殊性(2)を無視できない鹿角郡内でも，特にその特殊事情が重大な条件となって，調査作業を困難ならしめている地域で，したがって工事施行にあたっては，この一過的調査に基づいて，万全と考える資料とすることができない。

この報告書が示す結果がもつ，最も主要な意味は，実はこの点にある。

〔註〕 (1) 此の章は秋田県文化財調査報告として出版されるはずの原稿と，ほぼ同文である。
(2) 東北縦貫自動車道遺跡分布報告書（十和田・小坂町地区）秋田県文化財調査報告書第20集　昭45・３　PP２

A　路線の地理的条件

計画路線の地質事情については，路線全域にわたりほゞ同一であるが，地理的には多くの異なる情況を地点ごとに示している。この情況が遺跡の分布を左右することは，現代集落分布事情とほゞ同様である。

鹿角市花輪の東北端近くから，北東方向に向かう農道路線は，東側間近に迫る低夷山地の西麓を埋めた火砕流段丘の平坦面を通る。

猿平を通り同市大曲までは，標高ほゞ160m，東側山地の蝕剝面との高差は 50m，である。この間の距離約1,500m。

これより方向を北に転じ，柴内西町南端の県道花輪大湯線までは，既設道路であり，必らずしも本格的な短絡道路ではない。

本格的直線コースは，柴内西町南端，県道より始まり，東南に約750mを，段丘面を横断する。

これより方向をほゞ北に転じて約1,000mは，山地の西端に接するが，さらに方向を北東に変え山裾を高圧送電線沿いに約900m，西側は一帯の有名なりんご園で，北東 ～ 南西に延びる段丘の横断幅が，800～900mに達する広大な平坦面である。

餅野と呼ばれるこのあたりから，路線は長野集落の西をかすめて，北微西にまっすぐ，約1,500m，これまでと異なり，菩提野扇状地の西縁近くを延びる。この路線に沿い，湧泉ラインが並び，したがって間瀬川の谷や，根市川の支谷を横断する。標高約155m，扇状地の構成物質は，言うまでもなく礫層である。

路線は級ノ木集落の西縁をほゞ北に400m，次いで依然扇状地を横切って北々東に約900mで十和田地区に入り，下草木の集落の西端をかすめて，根市川の南岸に沿い北東に方向を変え，川を渡って北に600m，軍森と呼ばれる独立山地の東麓に達し，ようやく扇状地を離れ，北西に向け，標高170～180m 丘陵の尾根を越え，再び根市川の上流の谷を渡って風張台地にのぼる。この距離約100m。

風張台地では国指定の遺跡「大湯環状列石」の北東約 500m を横断し，風張集落の西側を斜めに段丘崖をたちきり，段丘中低面を通過する。此の間約1,000mで大湯川の低位面に達する。地盤は十和田火砕流である。

次に水田地帯，国道，大湯川を横断し，腰廻集落の北東部に入り，段丘縁と並行にそのまゝ南西に延びる。こゝは再び段丘面である。

大湯川の低位面の横断は約800m，腰廻以西1,100mを測る。腰廻台地は，大湯川低位面よりの比高約50m,風張台地と同じ標高180mの火砕流段丘である。

道はこゝから北西に向きを変えて段丘を横断，400mで芦名沢の段丘崖を降り，谷を渡って下芦名沢の集落より中位面を西に約700mで，長者久保，四ツ谷集落を経て小坂町の牛馬長根と呼ばれ

る山地の東麓を通り，牛馬長根の集落から小坂町荒川，大生手の両集落の間を抜け，毛馬内～小坂を結ぶ県道と連絡して終わる。この下芦名沢～長者久保間の谷を渡って終点までの低い山地の路線は，北西方向から次第に西方向に向きを変え，この間約3,300mにも達するであろう。この間はほとんど未開発の地を工事することになる。標高約200mに達する箇所が多い。

以上のルートには，大湯川の低地帯，風張台地と扇状地間の山地，鹿角市北方の集落乳牛から南東に向かい，大曲の北で初めのルートと連絡する別ルート案もあるようである。

すなわちこれらの路線の通過する地域は，大別して火砕流段丘，その谷に開けた水田地帯，扇状地，大湯川の低位・中位段丘面，低夷な山地，段丘崖などの地形変化がある。

B 分 布 調 査

分布調査に当っては，一万分の一地形図に路線を記入したルートマップを用い，航空写真を併用したが，中心線に打たれた杭の両側約5mずつ，すなわち幅10mの区域中，歩行可能な地区のほとんどすべてを踏査した。

ただし水田中，あるいは既工区域は除外し，クマザサその他で歩行不能の区域は避けた。

先述のように，この区域の全域は，大湯降下火山灰層およびその二次層，低地帯は洪水シラスがおおい，深く耕起されるか，工事などによって，たまたま火山灰下の遺物が地表に現われている箇所以外は，全く遺物の露出を見ることはなく，また耕作の都合上，なるべく降下火山灰層を表土と混合しないように耕起する習慣である。

したがって，今回調査の長い路線は，幅約6m～10mと限られた幅員であり，よほどの事情がない限りは，路線上に遺物の散布を望むことは不可能である。これは過去2年にわたり実施した幅4kmの東北縦貫自動車道の調査においても実認されたことであり，そのためのデモンストレーションとして，柴平字餅野の一地点で発掘を実施した。その結果は別に記載したとおりであるが，外表，遺物の散在しない地点においても，竪穴などの遺物が存在することを立証し，地形，居住条件その他を考慮に入れた考古学的判断の必要性を立証した。

また数回にわたりルート上を往復し，ボーリング棒を用いて，地中の埋蔵遺物を探索したが，前記火山灰層が厚く，ボーリング棒を通さない地点が多く，この方法によることはほとんど効果を示さなかった。

以下発見地点について略記する。

C 遺　　跡

（本章の図番号は此の報告書の図番号と一致しない。）

No.1　　第1図1，遺物拓影（第5図）

測点No.R722よりNE方向に15mほど距てた段丘端部。予定路線よりわずかにはずれる。遺跡東側は急傾斜をなし，館状と思われる。

遺物は土師器？および焼成の悪い須恵器と考えられる数片で，土師器－須恵器使用の平安時代末期の住居址群と館状遺構と考えられる。〔地名表No.1，鹿角市十和田上向字四ツ谷38，民有地　佐藤清一〕

No.2　第1図2，第4図，遺物拓影（第5図）

館遺構の空濠であり，No.3と相対する。　100m×100m　の平坦な畑地。予定路線の面より比高20m，中心線の北側。

空濠部分に直角に切断すれば館の時代が判明するはず。

遺物は縄文早期末の土器片および土師器である。〔地名表　No.2　鹿角市十和田草木〕

No.3　第1図3，第4図，土器拓影（第5図）

No.2遺跡の向かい。測点No.333～No.335杭のSE方向。眼下に下草木の集落をみる。館に伴う柵列また住居跡群。〔地名表No.3　鹿角市十和田草木？〕

No.4　第1図4　第4図

いわゆる風張台地の路線全延長である。大湯環状列石周辺の，環状列石墓群を遺した集団の数個にわかれた集落の存在は，その存在が考古学上当然予想されていることで，近ごろ周辺の竪穴群の多くを含む地域の工事消滅，加えて，列石に膚接した地域の地形変形など目に余る状態である。

No.5　第1図5

下草木部落南側の段丘一帯である。さらに南の級ノ木集落との同一帯には遺跡埋蔵の公算が強い。

No.6　第1図6　第2図

デモンストレーションとして任意に実施した発掘により9世紀後半，11世紀の間の竪穴群の存

在が確実となった。

出土遺物は，木葉文底のある大型のカメ，ろくろ手法による内黒土師坏等多数で，目下十和田高校において報告準備中である。

D 結　　論

以上調査の概要に報告したように，今回の分布調査は，以下の結論をもたらした。

1　分布調査の場合，地質条件の左右する要因はすこぶる大きい。特に火山灰が遺構や包含層のすべてをおおう場合，その地域が未開発区であるような場合は，発見のないのが普通である。

2　特に幅員の定められた道路敷の場合，一定間隔の試掘を試るより方法がなく，そのためにはばく大な日数と労力と費用を要するであろう。

3　上記2の場合でも，その調査区間は，全延長上に及ぶべきでなく，工事の年度ごとに区分して行なうべきである。

4　しかし餅野においてデモンストレーションの結果，竪穴を検出したことは，換言すれば，ほぼ全域にその可能性があると言える。

5　4の推論が極端であるにせよ，その可能性は，鹿角市内の遺跡の多密性にかんがみて，あえて過大評価ではない。

6　以上により，工事前の点による試掘こそが遺跡保護の最適な方法である。

7　今般調査の路線上の遺跡は，点でなく〝線〟である。

この存在のしかたについて，工事施工者と調査者の連絡協議，説明の会議を持つことが望まれる。

Ⅲ　発　　掘

A　発掘調査団の構成

発掘の主体	秋田県教育委員会
発掘の責任者	秋田県教育長　山本　一
発掘担当者	奥山　潤
兼調査員	
発掘調査員	(仝十和田高校) 福原　和虎, (県立大館桂高校) 田中　修造, (仝十和田高校定時制大湯分校) 佐藤　寛直, (秋北バスＫＫ) 高橋　昭悦, 小山　純夫
発掘補助員	(県立大館桂高校社会部)　伊藤　照子　安達　和子　西根　律子 立石　康子　京谷　悦子　河田美智子　渡辺　淑子　辻　緑 桜庭　真澄　工藤　早苗　庄司こずえ　千葉　智子　佐々木量子 荒川恵美子　照内　雪子
	(県立大館商業高校社会科研究クラブ)　小堀　一　三浦　鉄男 安達　道広　中村　政一　小林　文明　中川寿美男
	(県立大館鳳鳴高校社会部)　千葉健一郎　鈴木　享　畠山　光政 和田　悟　石川　均　成田　秀義　竹村　義久　山本　悠 高松　由和　佐々木信雄　渡辺　務　佐藤　清悦　杉渕　恭子 伊藤　裕子　富沢　文子　越前谷千鶴子
	(県立十和田高校社会科研究同好会)　浅石　金称　黒沢　善春 坂本　勝　小林　二夫　成田美代子　田子　敦子　奈良　聖子 森下　照子　古川真理子　松岡　孝子　石井つみえ　高瀬みずほ 高瀬　政枝　(県立花輪高校有志)　佐藤　隆夫　相川　弘樹
輸送支援	(陸上自衛隊秋田駐屯地第21普通科連隊) (第一班) 進藤恵一二曹, 加藤勇士長, 池田林一士長, 高橋信行士長, 内田英雄士長, 根本秀彦一士, (第二班) 占部保亀二曹, 長沢正三曹, 佐々木二三夫士長, 東海林均士長, 野呂政嘉士長, 小笠原茎一士長,
炊事担当	(十和田高校生) 第一班　杉本　澄子　片山　和子　村木美津子 橋場　孝子　第二班　加藤　朝子　仙台久美子　畠山ちづ子 畠山　洋子
発掘事務担当者	(県教育庁文化課)　門間　光夫　(鹿角市教育委員会) 柳沢　兌衛

B 調 査 日 誌

昭和48年７月24日

奥山・小山，大館８時出発。途中鹿角市教育委員会に，社教課長，当発掘調査の事務担当者，柳沢氏を訪ね打合わせ。一旦大湯入りし，後下草木周辺を巡る。昼に大湯分校入り，１時過ぎより各高校生相次いで到着。県教育庁の門間氏及び自衛隊々員６名（車輌２台）も到着，十和田高生と自衛隊員は人員運送ルート確認に出発。十和田高福原宿舎入り。夕食前，鹿角市教育長発掘担当者より調査の説明あり。各高キャップにより班編成，その他打合わせ。晴，気温高い。

７月25日（第１日）

全員下草木現場に向う。男子先発しテント２張り設営，第１班・第２班は小山と折返し同地より北方約１kmの丸館表地区に向う。奥山・福原と他の班は下草木現場にトレンチを設定する。丸館表現場は，発掘調査予定地より約200ｍ 北に位置し，土地所有者により，予定路線を削平されており，既に下位火山灰層まで露出していたが，一部の黒土残留地点を調査したところ，方形の住居跡発見。住居跡内から須恵器片と土師器片数点出土。柱穴なども検出。猛暑のため作業進まず，また，火山灰白粉化して要領を得ず。夕食後，佐藤調査団に合流す。　晴，気温高い。

７月26日（第２日）

前日に引続き，第１・第２班は丸館表へ奥山・佐藤・小山と向い，他は福原と下草木現場へ向う。下草木現場は幅４ｍ（中央にアゼを残す。）長さ20ｍのトレンチで，上位火山灰まで掘り下げる。丸館表現場は，住居跡内の精査及び周辺の黒土残留地点の剝土。Ａトレンチも設定。住居跡内より深さ60cm位の長い溝現われ，他の黒土残留地点からも検出する。　晴，気温高い。

７月27日（第３日）

丸館表現場，小山・商業生５人・他女子全員。住居跡の横に新たに溝を検出。連日の猛暑のため交替で作業する。午後，奥山・佐藤・他男子生下草木現場を撤収し餅野へ向いテント設営し，前年十和田高で発掘した住居跡を中心にしたグリッドも設定す。(朝，桂生１人病院へ行く)
晴，気温高い。

７月28日（第４日）

丸館表現場，小山・商業高・桂高生実測とセンターラインNo.341まで剝ぎ取り，昼前田中合流す。センターライン近くで柱穴らしき小ピットを検出し，横に落ち込みと灰の残留箇所があったが，ナイロンなど混入し，最近の廃キ跡と思われる。住居跡内より新たに柱穴検出（灰の残留下より）。餅野現場は前日に引き続きグリッド内の掘り下げ，縄文及び土師器片多数出土。午後，

佐藤と十和田生は土器片出土の情報のあった長野の耕地整理現場へ向うも朗報なし。晴,気温高い。

7月29日（第5日）

小山と商業生2名と当日合流した高橋は丸館表へ向い，奥山・田中他全員は餅野に向う。丸館表では灰の残留地点を撤去するも何もなし。高橋・小山は下草木第1現場のブルドーザー剝土状況を調査するも，遺物，遺構の確認はなし，午後，餅野現場に合流す。餅野現場南方約100 mの予定線上の切通しにピットの断面を発見せるも発掘には到らず。作業早目に終了し大湯ストーンサークル見学，明日休日の発表あり。（鳳鳴生1人病院へ行く）晴，気温高い。

7月30日（第6日）

終日休み。くもり時々雨。

7月31日（第7日）

朝，担当者入院の知らせがある。雨天なれど全員餅野へ向う。花輪高校生有志2名参加あり。雨強く午前中にて作業中止。小山・大館に行き，奥山より今後の指図を受ける。終日雨。

8月1日（第8日）

前日病床の奥山先生より指図のあったE3，W3の新グリッド設定する。また（E区も拡張する。晴間を見て作業するもはかどらず。桂生1人病院へ行く。終日雨。

8月2日（第9日）

午前中は雨のため休み，田中・小山は現場の状況及び周辺の地形調べ。午後出発，CE・CWの両拡張区の結合，CWトレンチの隅からピットらしい陥込み検出するも完掘に到らず。雨ときどき曇。

8月3日（第10日）

E1グリッドとCE拡張区の結合，及びCW隅のピットの掘り下げ。佐藤・他十和田生4名再び長野の耕地整理現場調査に向う。また，桂生により南方切通しピット断面露出の地点にトレンチ設定，幅約50センチの溝を検出，遺物は表採の土師片のみ。午後自衛隊員の交替あり。雨時々曇。

8月4日（第11日）

数日振りに晴る。各トレンチ，グリッドの精査，また，テントを移動し新たにS1・S2のトレンチを設定する。S1・S2の結合点よりピット2つ出現する。両トレンチ共遺物はなし。午後，

各グリッド・トレンチの土層断面及び平板実測始める。福原南方切通し上部に新トレンチを設定。本日午後丸館表削り取られる。（数日来の雨で溝に溜った水が印象深い）晴。

8月5日（第12日）

S1・S2トレンチのピット完掘する。またW1・Eグリッドの一部結合したところ，柱穴が検出される。午後，実測とテントの撤収。本日を以って発掘調査を終了する。晴。

8月6日（第13日）

宿舎大湯分校の大掃除及び道具洗い。夕食前，県教育庁門間氏，鹿角市教育長の挨拶。自衛隊帰隊す。夕食後，発掘終了慰労会を行なう。晴。

8月7日（最終日）

慰労会八幡平行き，帰途随時解散。

C　各発掘調査区とトレンチ（グリッド）の設定

1　下草木現場（鹿角市花輪字小坂野）

この現場は1図に示す通り，北に下草木部落，南に級ノ木部落を臨む南北約200mの幅で北東から南西に延びる標高およそ158～188mの台地で，台地上のほとんどが畑地となっていて，タバコ，野菜などが栽培されている。

大規模農道の路線は1図の通り，台地上に現在ある農道上を通るため，北側農道上及び隣接した畑地（現にまだ作付けしている）は発掘調査することが出来ず，南側半分の予定路線上の休耕地を調査することになった。

トレンチはセンターラインを中心としたアゼを残し，両側に2mずつ，長さ20mのトレンチで発掘は上位火山灰の下部まで掘り下げたが，住居跡などと思われる陥込みは検出されず，トレンチ北側に1本の溝状の浅い陥込みがあっただけで，発掘された遺物もなかった。また，周辺の表面採集も皆無で，後日ブルドーザー剝土の際も，遺物，遺構は検出されなかった。

2　丸　館　表

下草木現場より北方約1kmの地点にあり，調査日誌にもあるように，土地所有者により下位火山灰まで，既に削平されていたため，トレンチ設定の必要はなく，ホウ・ジョレンによって手軽に黒土残留部の全面剝土となった。しかし，ブルドーザーにより住居跡内の遺物が剝ぎ取られた

形跡もあった。発掘地点の北側は軍森に続く杉林で，東西は畑，また南側は沢状の水田が下草木方面に延びていて，実はこの沢状水田の両側が今回の調査各所であったのだが，農道路線はほぼ水田の上を通り，側端は段丘の端の一部しか通らず，下草木現場と同じように一部同調査区のある畑には作付けされており発掘調査は出来なかった。遺物は土師器と須恵器片が出土している。また遺構は方形の住居跡と性格不明の溝が数条検出されているが，詳しい考察は後に譲る。

なお，この住居跡の時代・性格とつながりがありそうな館状地が，同現場の南西約1kmの丸館にある。また，南方約100mの地点では前年（47年）に十和田高校による発掘があり須恵器が出土している。

3　餅　　野

餅野は北東約300mに長野の集落を臨み，東側に鹿角市を南北に走る奥羽山脈を遠望し，花輪から柴内・長野を経て菅堤野方面へ行くバス路線と農道線がX状に交わる地点にあり，長野の北を流れる間瀬川と併行して北西の高市に延る標高150～160mの段丘端にある。

発掘は前年（昭和47年）に十和田高校で発掘した住居跡を中心とした段丘端に，グリッド・トレンチの併用で行なった。なお，グリッドと言っても，両側を畑とバス道に挟まれているという特種事情のため，掘り起こした土の捨場がなくて，全面発掘も出来ず幅2m位のアゼを残して土を上げる必要があり，いささか変形したことを予め断っておく。

簡単に遺物と遺構の出土状況を記す（詳しくは次章へ）。

遺物はE1・W1・CE・CWに圧倒的に集中していて，ほぼ同位面で縄文土器片と土師器片が混出している。

E2・E3・W2・W3は数点の土器片が出土した以外は何も無く，無数のネズミ穴があるのみ。CWからは土器片と小判型のヒットが検出された。S1・S2トレンチは，出土遺物は無いが，ヒットが2つ検出された。

また，隣接する畑地からも多数の土器片などが採集される。

また，南側約100mの農道路線地点の切通しに露出していた陥込みは，上部の幅3m位い残っている部分にトレンチを2ケ所に設定した。発掘遺物はないが，対面の切通し上部には土師器片が採集された。遺構は，陥込みから続く性格不明の溝が検出された。しかし，これも隣のトレンチでは，ごぼうの植込み跡があることと，傾斜地であることからして疑問である。

約2週間の発掘だったが，前半は連日の猛暑，後半は連日の雨による下位火山灰の白粉及び泥濘化，路面発掘調査という特種性（土の処理と発掘面の限定による遺構の性格判断の難点）及び発掘担当者の突然の入院など，各種のアクシデントがあったが，今回の予定調査地点はほゞ調査を終了し，遺構・遺物の出土もあり，一応の成果は成されたと思う。

Fig 2　丸館表遺跡発掘全体図

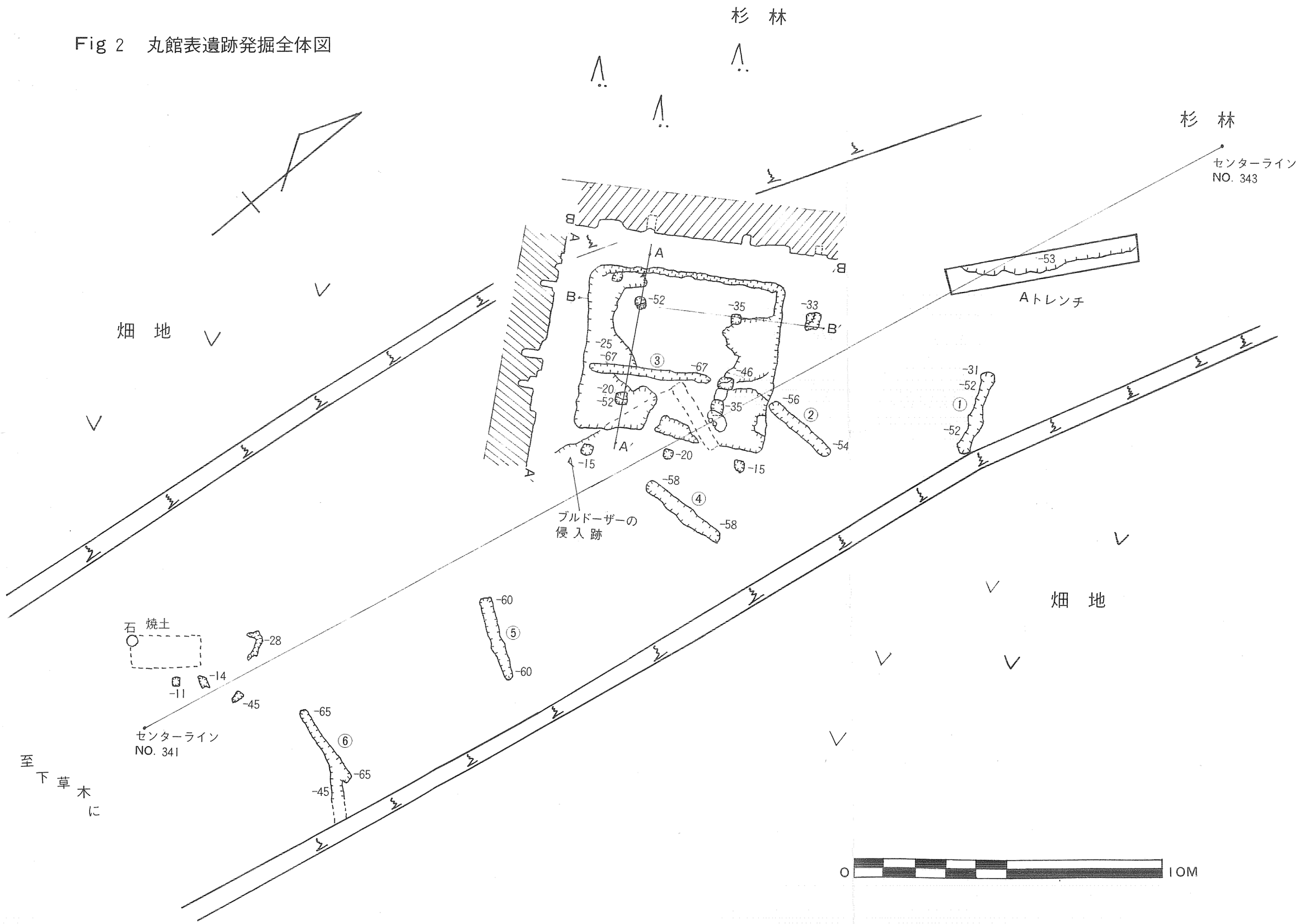
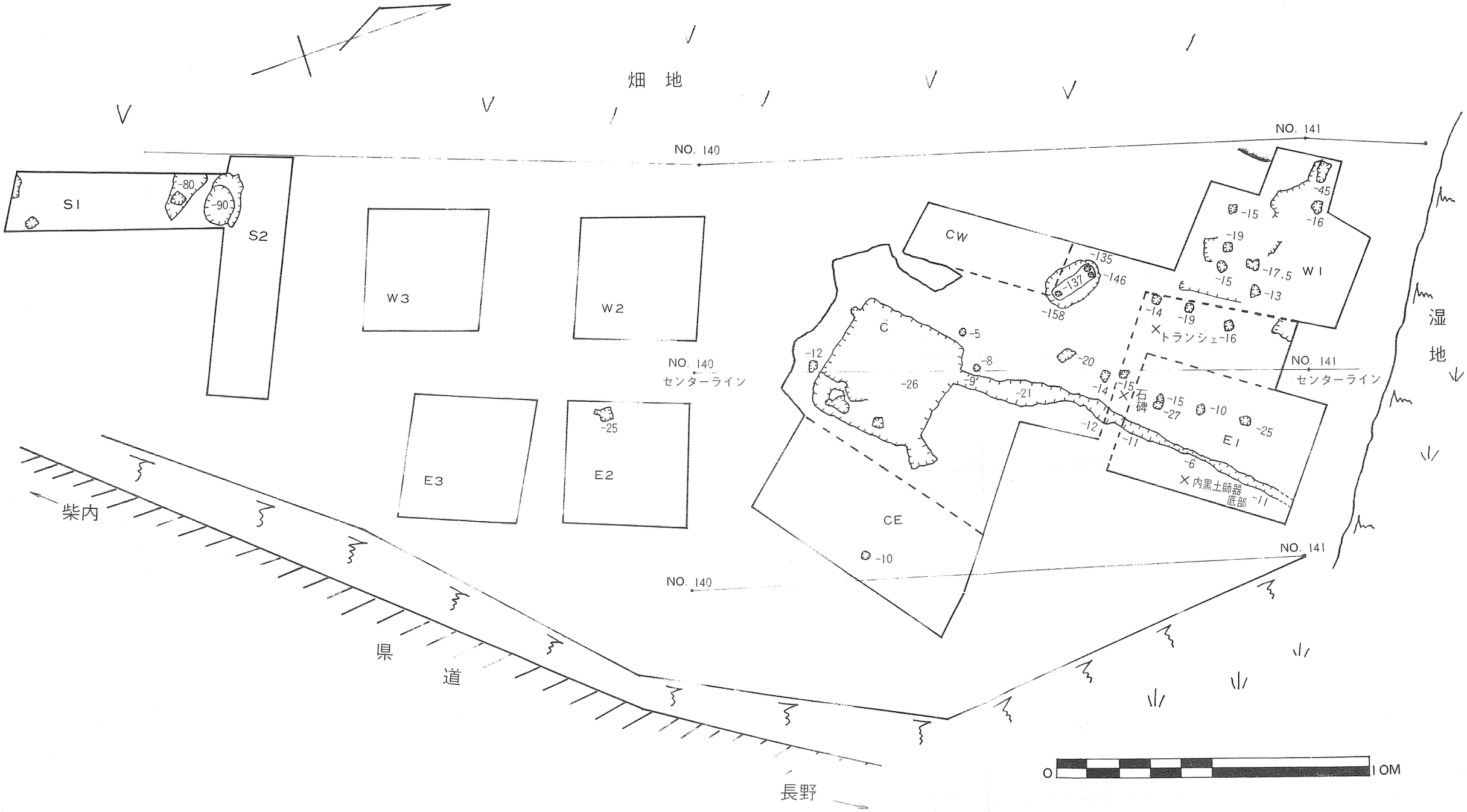


Fig 3　餅野遺跡発掘全体図



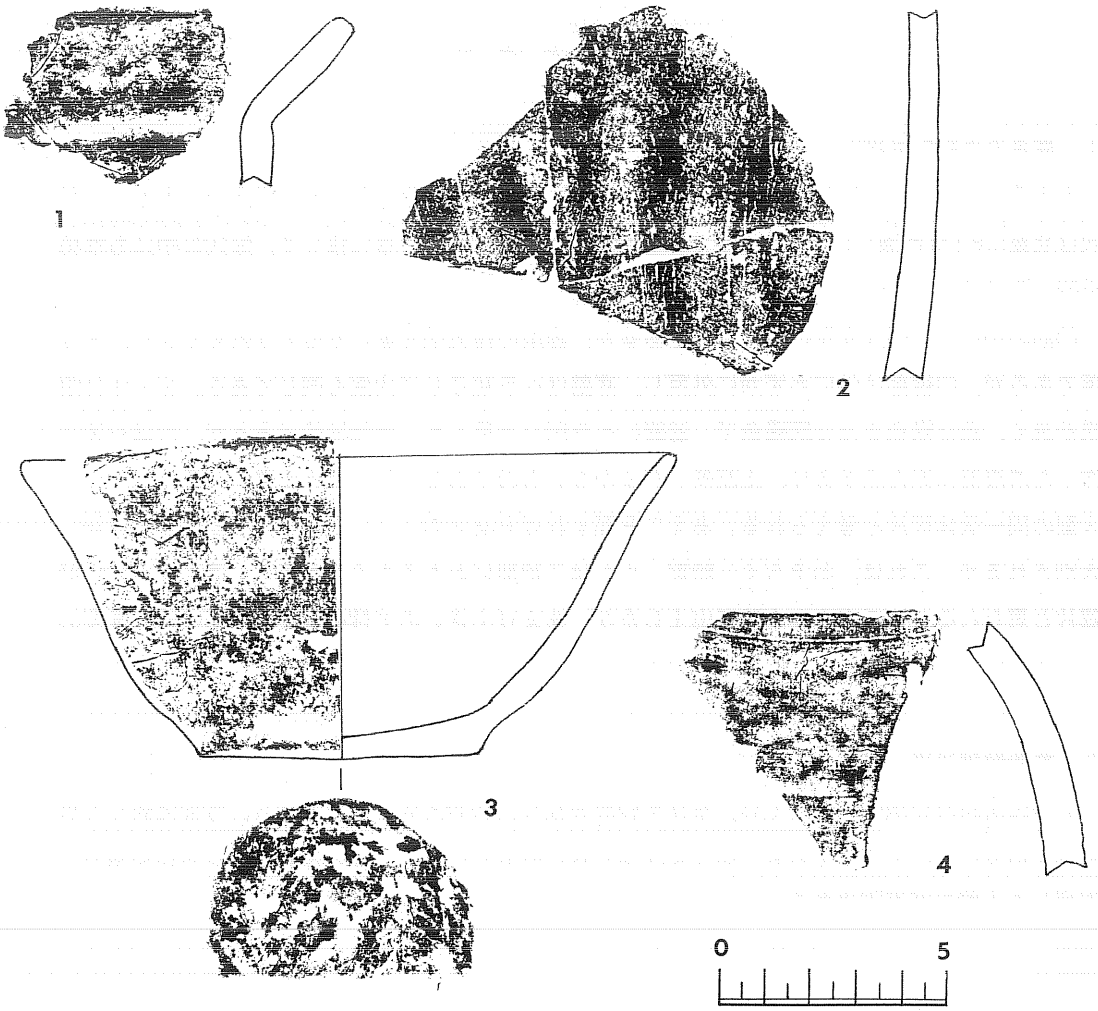


Fig 4　丸館表出土土師器・須恵器（PL 16）

Ⅳ 遺物と遺構

1 鹿角市丸館字丸館表

出土遺物は土器と凹石と考えられる石製品の破片である。遺物の殆んどは竪穴から出土し，竪穴は北東に6.5m南東に5.3mの1個であるが，そのほかに竪穴の東に接して，竪穴の中にも性格不明の溝状遺構（Fig2の①～⑥）が発見された。

Fig4の拓影図は竪穴発見の主なものであるが，器型の復元図を書けるものは殆んどなく，3は椀であるが，口縁部は外にわずかに外反し，底部はヘラ起こしで内面も同じである。2・4は焼成が良く，色は褐色または灰褐色で，器面にヘラ削りが見られ，土師器的であるが，のぼり窯で作った須恵器に似た点があり，土師器ともつかないものである。他の出土土器の大部分は，やや大型の同一個体破片と考えられる。あえて分類すればFig3のような土器と，2及び4の三類に大別されるが，これは，おそらく一時期，または二時期にわたるものであろう。溝④からは土師器片と思われる二片の小さな土器が出土したが，あまり小さいので性格は不明であるが，溝④の中ほどの所から出土しているので，他の土器と同一時期に考えてもさしつかえないであろう。

2 餅野発掘遺跡

2の出土品及び遺構については，県立十和田高校社会科研究同好会が発掘し，今春発表した機関紙があるので，それをそのまゝ伝える。Fig8は餅野竪穴内出土土器の拓影，Fig9は餅野竪穴に充填した土層の断面図である。

餅　野　遺　跡*

十和田高等学校社会科同好会

はじめに

今回の発掘は，大規模農業道路建設予定地における遺跡分布調査の一環として行なわれたものであり，また，十和田高等学校社会科同好会の，発掘調査の技術と，知識の向上を目的として行なわれたものである。

夏休み，道路建設予定地を，地図と各所に打たれている測量杭をたよりに，ボーリング棒とスコップを手に鹿角を縦断し，この発掘に至ったものである。

発掘地点は，鹿角市花輪柴平字餅野一番地の内で周囲に陸稲が植えられている畑地を昭和47年の8月3日・4日・5・6の4日間にわたり調査した。私たち社会科同好会にとって初めての歴史時代の遺跡の発掘調査報文である。

＊　大規模農道路線に遺物の散布があまり少ないのでデモンストレーションとしてこの発掘をしたものである。

ここに発表するのは，その出土遺物，遺構の説明であるが，何分にも，縄文時代以外は発掘経験のない者がほとんどで，読んで下さる方を満足させるのは，はなはだ困難と思われるが，少しでも理解していただけるなら幸いである。

発掘地点附近の景観

発掘地点は，鹿角市柴平字餅野一番地の内で，雁府，上台，級ノ木などの部落が散在する扇状地の南端に位置する。国鉄花輪，大湯間を結ぶ県道がすぐ南東を通過する。遠く北に黒森山（昭和44年～45年，大館鳳鳴高，桂高，十和田高発掘調査，縄文後期）を望み，眼下には東から西へ流れる俗称マセ川が水田を潤しているのを見ることができる。

なお，以前この附近には井戸があったらしく，生活を営むには絶好の場所であったと思われる。

発　掘　調　査

東西・南北に直交する幅２メートル，長さ６メートルのトレンチを２本設定し表土を剝いでいった。15cmから20cm掘り下げたところで,火山灰状のものにあたった。この層は，トレンチが直交する中央部から東部にかけては，他の部分より特に厚く25センチ程の堆積をみる。層理は不整合をなし，他の部分では，10センチ内外の厚さである。あとで附近を調べたところでは，竪穴住居址外では，非常に薄いか，全くない。この火山灰状のものを剝ぐと，直下の黒色土層から土器片（内黒土師器を含む）が出土した。更に注意深く掘り下げてゆくうちに西側にあたるトレンチに黄土層とその落ち込み部分を発見。この落ち込みを住居址の一部と想定し，水平に拡張していったところ，方形のプランをもつ住居址が出た。

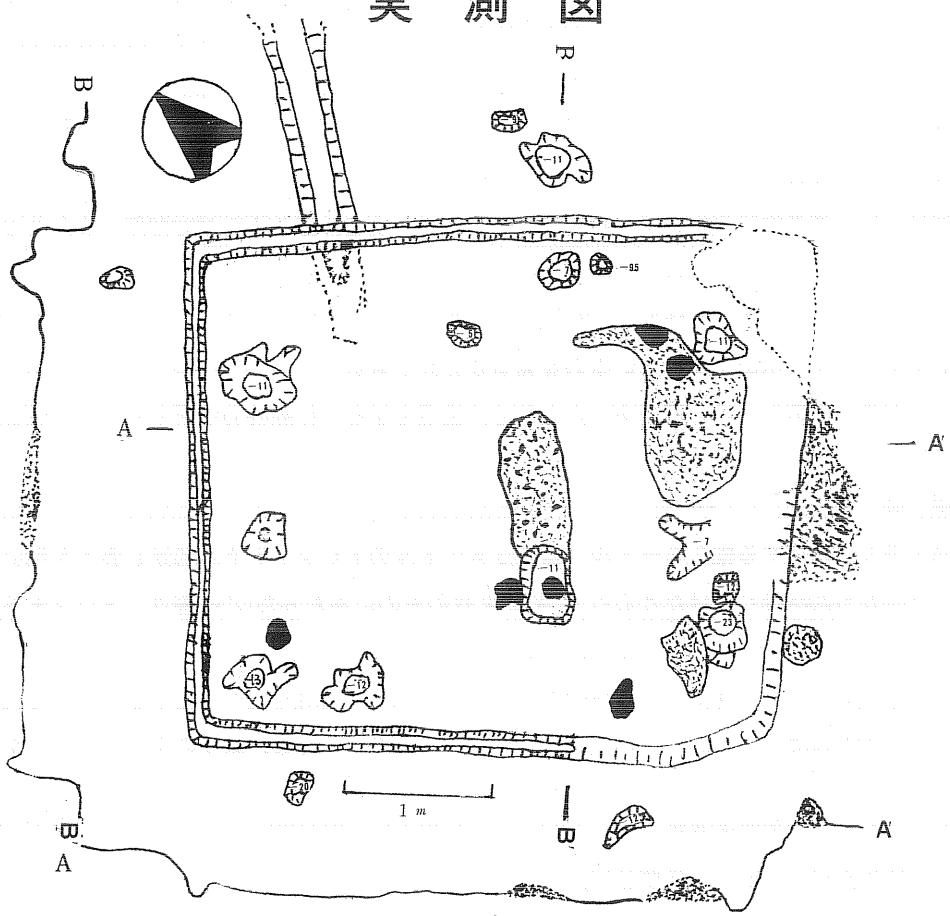
１辺3.5ｍの壁面は，それぞれ，南北に対してほぼ45度の傾きをなす。

遺跡内部の黒土を除去してゆくうちに，東よりの地域から焼土カーボン，灰と共に多くの土器片があらわれた。この焼土等をそのままに，住居址の床面まで掘り下げたところ，四方の壁面近くに10個，住居址の外側に３個の柱穴らしきピットをもつ遺構の全貌があきらかになった。

層　　位　（Fig ５の下，PL 14の１，２）

黒色表土層は，地点によって差異はあるが，だいたいその厚さが15cm～30cmである。その下に火山灰状の堆積があらわれた。これは層をなしていると言うにはあまりにも不整合であり，また住居址の周囲を一部調べたところでは，住居址外では５cm以下か，ところによっては無いところもある。この堆積物は，上部は細かい灰色をおびた砂状のものからなり，豆腐のオカラのような感触である。下部は黄色をおびた２mmほどの細粒物で，ザラザラしてスコップに乗りにくい感じのものである。この堆積物の直下に黒土層がつづき，この層が遺物含有層であり，住居址を直接覆っている層である。厚さは，住居址外では20cm前後，，住居址内では30乃至40cm位である。その下，今回の発掘では最下層となった部分は，黄灰色の火山質の土層である。この黒土層とこの

実　測　図



地層断面図

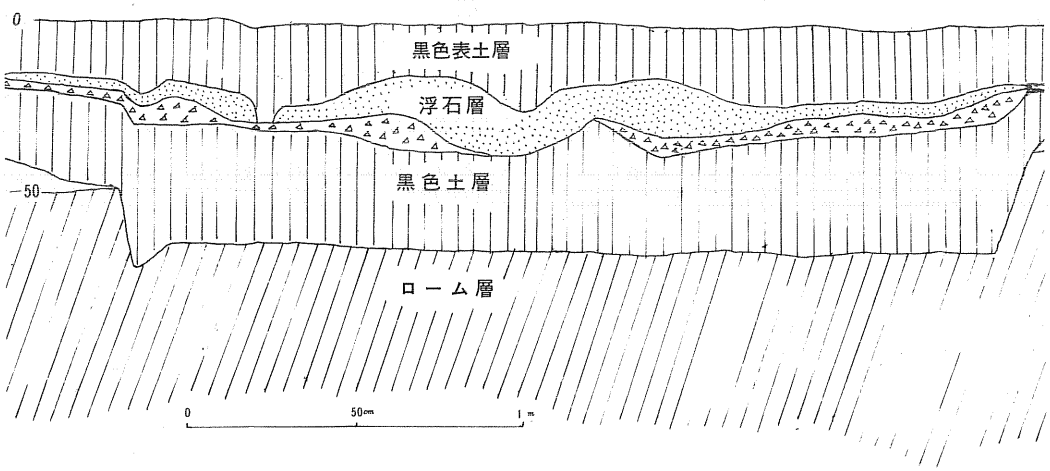


Fig 5　(上) 餅野土師器竪穴実側図
(下) 竪穴土層図

火山灰質の土層の違いが今回の住居址発見と，発掘作業を容易なものにした。

特に問題になったことについて

表土層と下位黒土層に，はさまれた火山灰らしき堆積物について，初め今までの経験から，単に大湯浮石層と考えて発掘をつづけたのである。ところが奥山潤先生に，それはおかしい，直ちに実物を持ってくるようにとの指示をうけ，持参したところ次のように教えて下さった。

これは，大湯浮石層ではあるが第一次的な降下物ではない。外見的に降下火山灰と思われるものが竪穴を埋めた黒土を覆っている。しかし，穴以外のところでは非常に薄いか，またはない。これを水洗い、腐植土を流してみると，軽石質のものだけで，大湯降下浮石層に特有の流紋岩の破片がない。したがって，この場合も菩提野遺跡の場合のように，竪穴の外にめぐらした土堤が竪穴が廃棄されたあとに流れこんだものと考えた方が妥当であろう。

遺　　構（Fig 5の上）

住居址は，表土から約70cm下のローム層上にあり，一辺が3.5mのほぼ方形をなし，遺跡の南に立ってこれをみた場合，西に45度傾いているといえよう。床面の周囲には，排水のためと思われる周溝がめぐらされた跡があるが，西南側の一部と東南側は確認できなかった。床面にはピットが11ケ所あり，そのうち9ケ所は側壁近くにあり柱穴の跡と思われる。また，住居址の周囲にも5ケ所にピットがあり，これも柱穴と推定される。

床面中央部および東南部の3ケ所に焼土と灰（カーボンのまじった灰）の堆積がみられ，とくに東南側壁近くには多量の焼土と灰が床面より26cmの高さまで堆積している。更に，東南の側壁の外側にも焼土がみられ，これらの関連については今後考えてゆきたい。また，住居址内の焼土，灰の堆積物は土器を伴ない，中には，土器内部に焼土がぎっしりつまっていた形跡もある。中央部の焼土の西側のピット内には，石と土器片およびカーボンが詰っていた。

なお，北方方向に伸びる溝状の遺構が検出された。この遺構は後の時代に造られたものと思われるが，その性格をつかむことができなかった。

最後に，この住居址の広さから推定すれば，同時期の家族数は4人前後と思われ，出土遺物などから長い年月に渡って人々の生活が営まれたと思われる。

出　土　品

生活用具の出土品としては土器だけであった。土器包含層は，大湯浮石層下の黒土層であり，なかには焼土，灰，カーボンの堆積物にまじって出土するものもある。

器型は大きく分類すると，瓶（かめ）型と坏（つき）型の二種類がある。

瓶型の土器は全般に材質が精選されておらず，ごくこまやかな小石を含む。表面は内外とも刷毛目様のこまかい擦痕を全面に認めることができる。ヘラ状のもので削って形を整えたとみられ

るものもある。口縁部の反りと胴部のふくらみに個性をみるだけで，縄文土器のように意識的に文様を施したものはない。なかには胴部と口縁の境いが水平にゆるやかに波状になっているものもありこれなどは須恵器に近いものと考えられる。底部は，ヘラ状のもので削った痕のみられるもの（Fig 6）と，葉脈がくっきりと出ているものがあった。
葉脈からみて，楢の葉と楓の葉のように思われる。これは製作中に土器を回転させるため底部の滑りを良くしようと木の葉を裏返えしに敷いたことによると言われている。(Fig 6)

坏型の土器は材質がやや良くなって，小石のようなものは全たくみられず，表面は内外ともに極く細い水平な縞目の紋様が入っており，ろくろを用いたらしい。底部は糸切りである。
外側の色は赤褐色のものや，灰色のものがあるが，内側は真黒で光沢のあるもの（内黒土師器とよばれる。）や外側と同色のもの二つがある。

他に非常に硬質の灰色の土器片が一片出土した。

時 代 考 証

土師器は関東の鬼高式（＝氏家第５形式＝くりがこい式）に相当するものよりも古いものは東北北部内陸には存在しない。しかも，関東ではそれ以後１・２期の土師器の時代がつづくが，東北北部では鬼高式が入って来ることによって，蝦夷の文化的，政治的体制がととのい，ひとつの蝦夷文化圏が生まれ，他の関東の土師器文化が入ってこない結果，鬼高式の形態の中から独自の形式が発達した。

時代考証は，出土した土師器のなかの内黒の坏の形式によって決定される。最近の工藤雅樹氏の見解によれば，内黒土師器のみならず，ろくろを使った土師器は，須恵器製作の手法をとり入れたものである。須恵器製作の手法は，氏家和典氏が奈良朝末から平安朝初期と言ってるに対しより具体的には，貞観11年（西暦870年）陸奥の国の大地震の際，多賀城を復旧するため新羅人をまねき，彼等が須恵器の手法を伝えた。そのろくろ手法を用いてつくられたものが内黒土師器である。また，他の具体例として，胆沢城遺跡（岩手県）から出土の土師器と対比して考えれば，胆沢城が造られた時以降になる。よって，九世紀後半から11世紀はじめ頃までの時期と考えられる。

鹿角の土師器について

私達が発掘調査した餅野の遺跡の他に，鹿角における土師器をともなう遺跡には，菩提野遺（「大湯町環状列石」文化財保護委員会，昭和28年）がある。また，今回踏査した中に，下草木において，内黒土師器と共に縄文土器片を発見した。また本校事務職員石川富子さんの畑から，内黒土師器を含む同形式の土師器と縄文の施された土器片が出土したと報らされた。図版・写真の中に「草木出土」・「神田出土」とあるのはそれであるこの２地域については後の機会に調査できればと考えている。

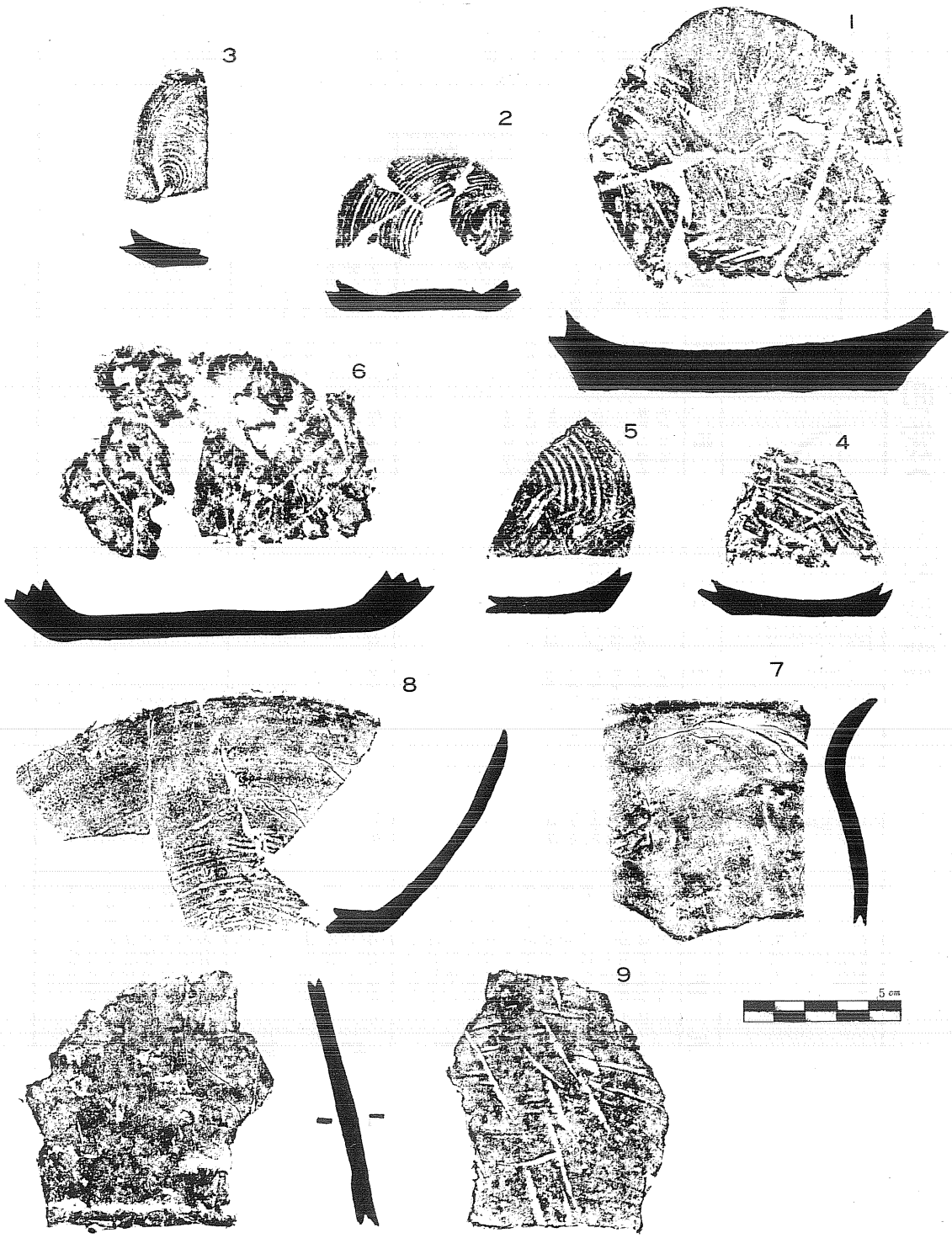
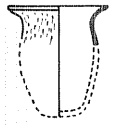
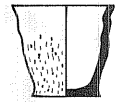
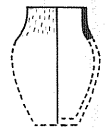
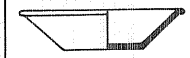
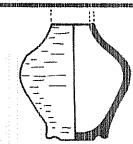


Fig 6　餅野竪穴出土土師器

器型とその特色

型								
出土地点		餅　野	餅　野	餅　野	餅　野	草　木	神　田	草　木
特色	器型と素材	○かめ型 ○砂粒を混ずる ○口縁部が大きく外反している ○器面は薄い茶色で荒く、でこぼこである ○無文で全面刷毛目様の細い擦痕を認めるものが多い ○同型では口縁部がやや外反しているものや、胴部が丸味をみせて口縁部が垂直のものもある	○砂粒を混ずる ○薄い赤褐色をしている ○やや硬い ○かめ型ではあるが口頸部に特色がある	○硬い ○薄い黄褐色 ○砂粒を混ずる ○無文で、でこぼこの器面 ○口径約11.5cm	○坏(つき)と呼ばれるもので、外面は赤褐色のものが多い ○かめ型のものと違い砂粒を混じない ○大きさ…口径約14cm 底径約6cm 高さ約6cm	○外面の半分は赤褐色をしている ○焼成が良く硬い ○胴部はゆるやかにふくらみ口縁部がやや外反している ○大きさ…… 口径約12.5cm 底径約 5.5cm 高さ約 5.3cm	○外面の半分は赤褐色をしている ○胴部はほとんどふくらみがない ○口唇部がやや外側につき出ている ○高さがなく皿のような感じ ○薄い赤褐色であるが、ところどころに茶色がみられる ○大きさ…口径約13cm 底径約7cm 高さ約3cm	○たいへん硬い ○厚さがないわりに重い ○一部は磨研されたような黒色で光沢があるが、その他の部分は褐色で面がざらざらしている ○頸部は不明
	内側	○器面は内部の方がやや荒い ○へらで型を整えたような跡がみられる	○薄い黄褐色	○(薄い)黄褐色	○光沢があり、真っ黒(内黒土師器と呼ばれているもの)と、外面と同色のものとがある	○すほどが丸くぼかしたように黒味を帯びていて、他の部分は赤褐色である ○全面光沢があり、スベスベしている	○薄い黄褐色	○暗褐色で紙やすりのように荒い
	底部	○餅野出土のものには葉脈のついているものや、へら削りの跡がみられるものがある ○同型では神田より出土したものが底部に糸切文がみられ、ろくろを使用した形跡がある	○外側につき出ている		○この器型の土器はすべて糸切文がある ○(同型で)神田より完形で出土した2個の土器にも糸切文がみられる	○糸切文がある	○糸切文がある	○底径約 8.3cm

餅野遺跡の出土遺物は，有機土層といわゆるローム層の間に包含されていたのであるが，ローム層に近く出土し，その編年位置は，「早稲田四類から，六類」に属するものであろう。

餅野発掘遺跡は，秋田県遺跡地名表によると，餅野Ⅰ遺跡の近くになっており，採集した土器片は弥生土器片になっているが疑わしい。また,北東の長野集落では，縄文中期の円筒上層a・b式が出土していることになっている。

今夏の発掘で出土した土器は類例が少ないが（北鹿地方では最初の発見である),地文の種類は少なく，出土片数は縄文167,土師器34で，縄文土器で秋田県でもっとも近いのは，和田吉之助・富樫泰時の両氏によって調査された，本荘市神沢遺跡の土器群である。ただし，無文，隆起線文のような神沢遺跡出土の土器と似たものはない。以下簡単に分類する。

第1群土器—縄文を右斜めに施した土器（Fig7の1・2・3）

第2群土器—縄文を左斜めに施した土器（Fig7の4・5・6）

第3群土器—羽状縄文の土器（Fig5の8）

第4群土器—縄文前期終りの円筒下層D式によく似た文様の縄文を使った土器(例えば,Fig 8の22～24)

第5群土器—羽状縄文をなすかも知れない土器（Fig8の26)

第6群土器—半截竹管文の押型文に似た土器（Fig8の28)

第7群土器—撚糸文を右斜めの縄文の上に施した土器（Fig8の29・30)

第8群土器—隆帯を持つ複合口縁の土器（Fig8の31)

第9群土器—竹管による曲線又は刺突文をほどこす土器（Fig 8の32)

第10群土器—土師器（Fig9の1～3）

第11群土器—須恵器と思われる土器（Fig9の4）

石器はトランシェ2つ（Fig10の1・2),コアと思われる剥片（Fig10の3),柄を持った，いわゆる石匙（Fig10の4）以上。

拓影に表わした土器は繊維を含んだものと，含まないものがあり，焼成は中程度であり，その一部は，例えばFig8の29のような丸底である。また，Fig9の3は内黒土師器で同図の1～4の土器はおそらく前年度発掘竪穴のやや上層に包含されるものであり，十二世紀を溯ることはない，なぜならば3の内黒土師器は十二世紀のものとしか考えられないからである。

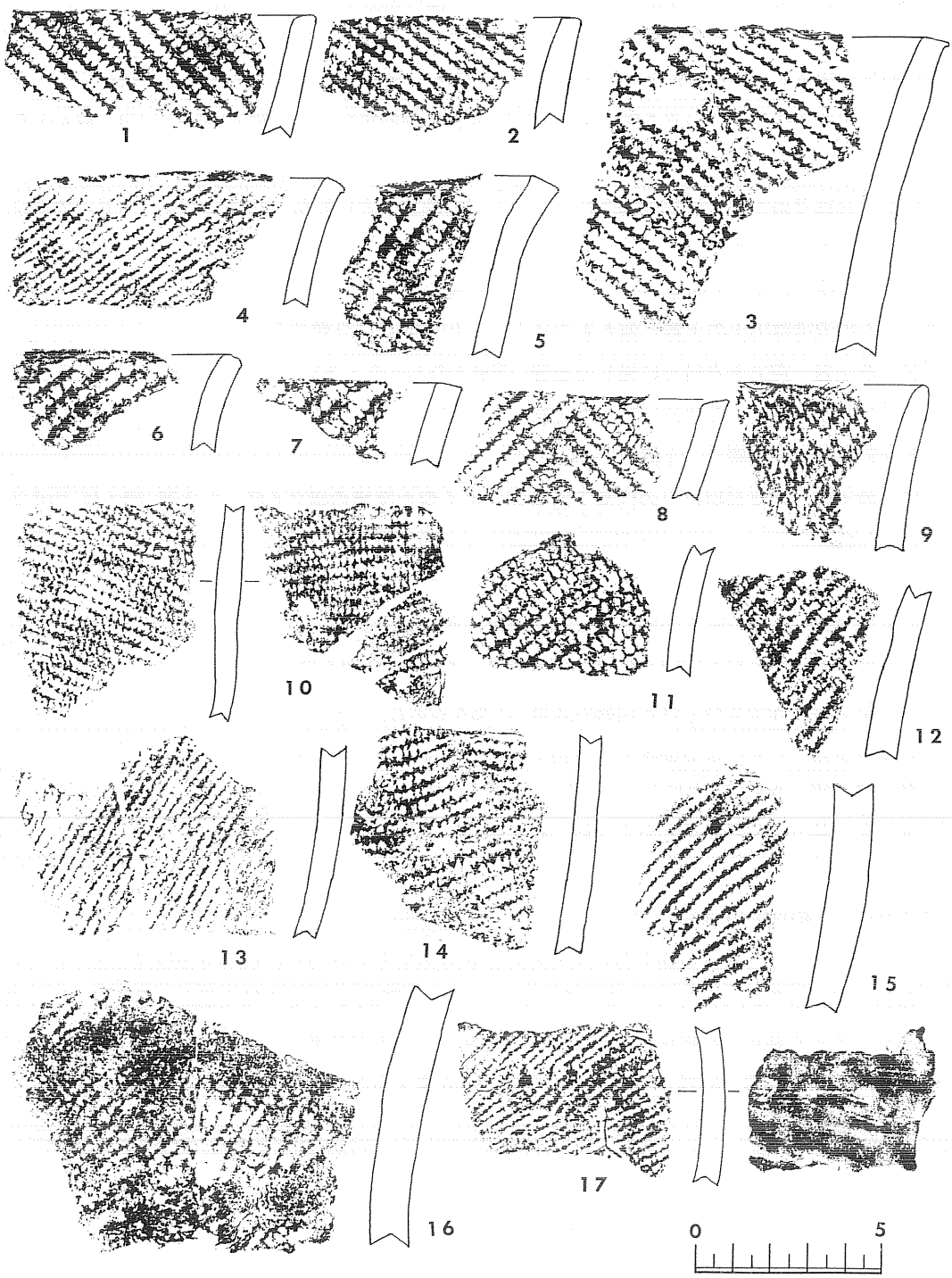


Fig 7　餅野遺跡出土遺物（1）

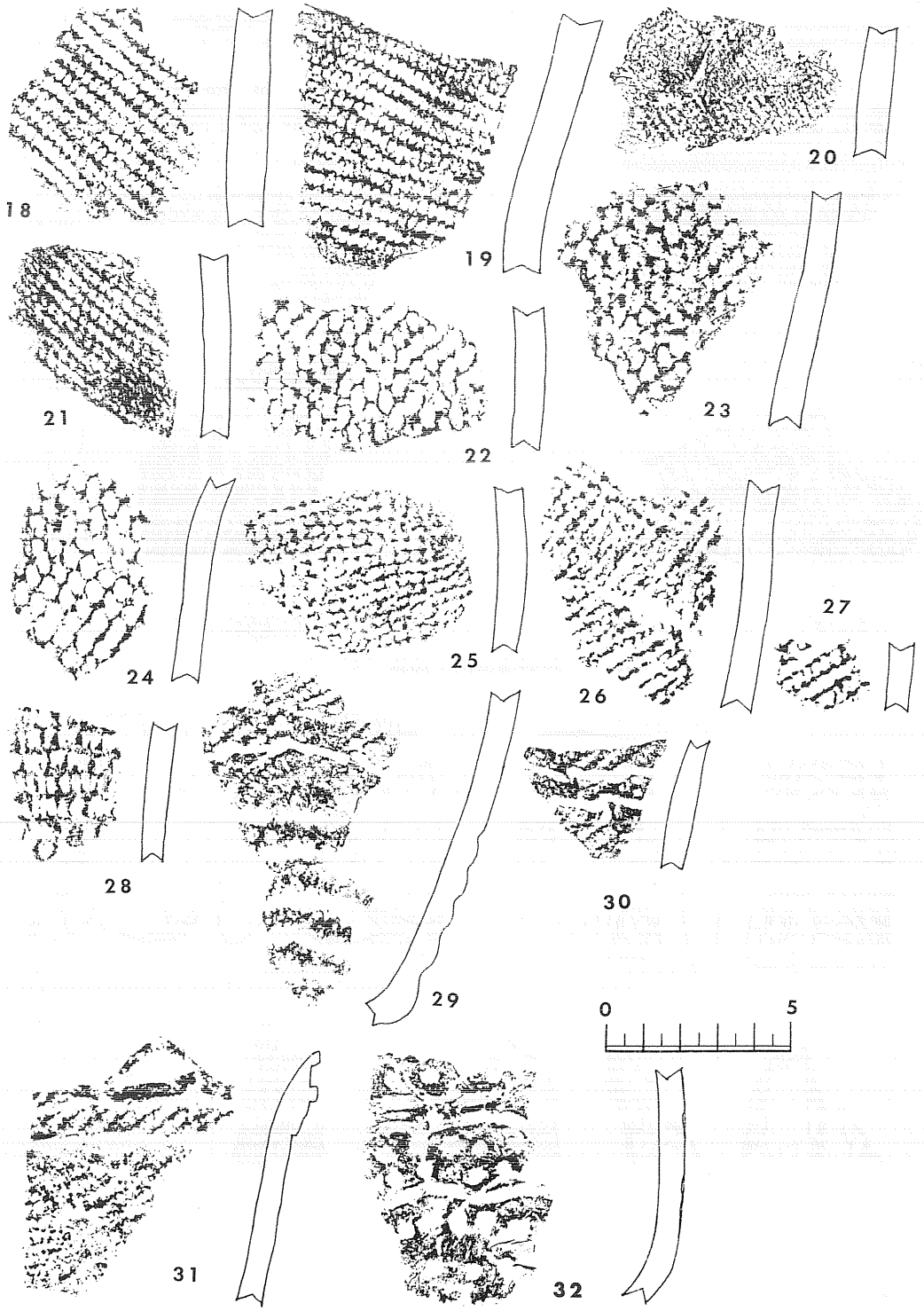


Fig 8　餅野遺跡出土遺物（2）

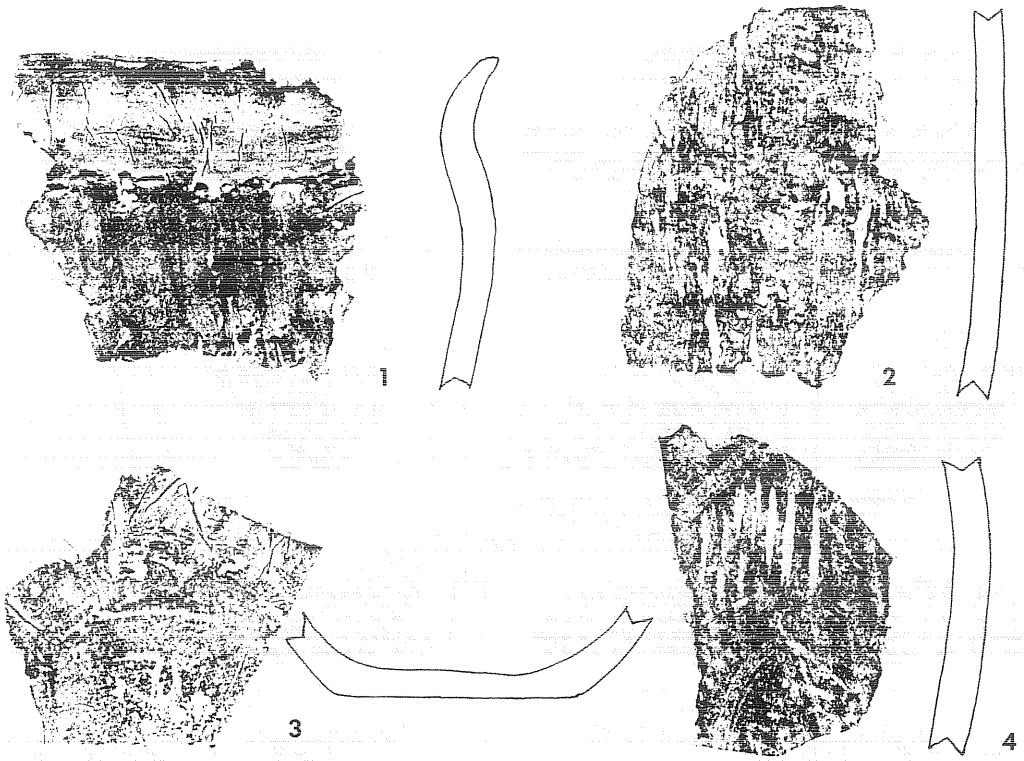


Fig 9　餅野遺跡出土遺物（3）

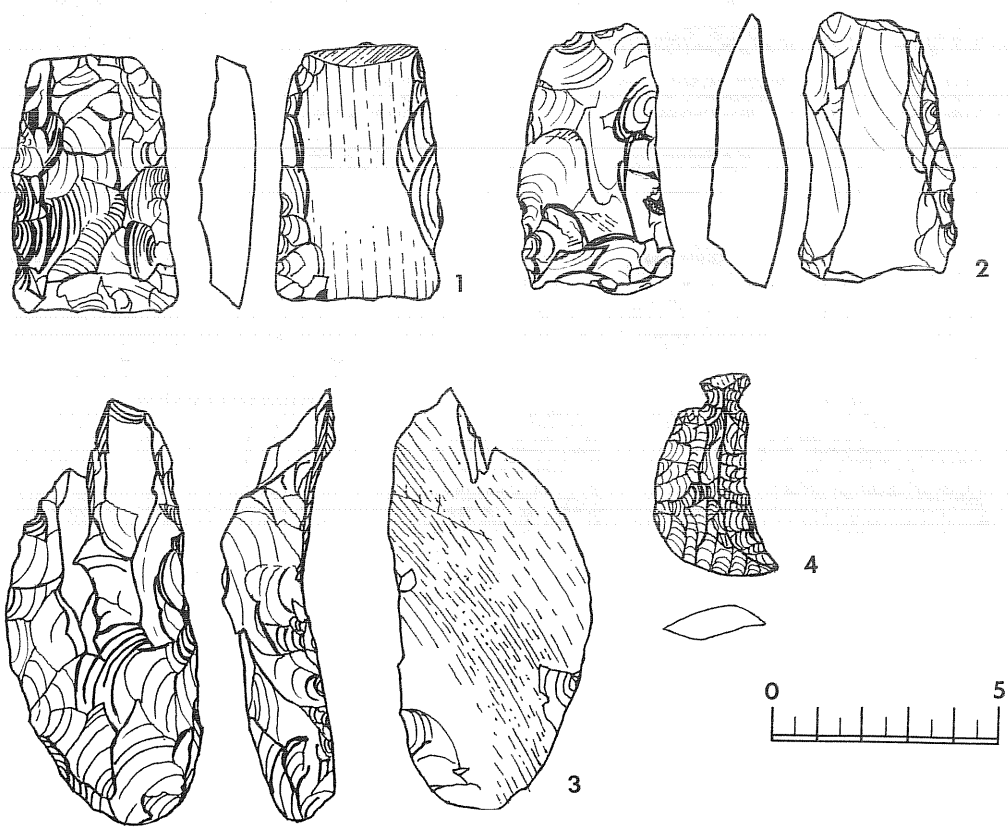


Fig 10　餅野遺跡出土の遺物（4）
（CW隅の石器）

V 考　　察

丸館表の土師器の中には，一見須恵器様の焼きを見せ，須恵器といってもいいものもあるが，製作技法上土師器とした。

第6号地点餅野出土遺物は，前年の十和田高校発掘に含まれるのはみな土師器であり，他のFig5・6・7は縄文前期から早期の丸底に及ぶものであり，ことに早期については，本県では類別が少ない。前期初頭から早期末にかけての土器は，黒森山麓でも一部出土しているが，鹿角では十和田浮石層，あるいは火砕流の間に包含されるようで，その発見が難しい。丸館表・餅野遺跡においても鉄器は発見されなかった。なお付属の写真（PL 20）は今回の分布調査でまったく発見されなかったもので，第4地点丸館表南方100mの地点で，農道側溝工事の際一部破壊され市当局に届出があった。これらは縄文後期の宮戸式に類する土器で，秋田県ではまとまって出土した例を聞かないので，来年度あらためて発掘することになり，もっか工事を中断している。

VI 総　　括

この発掘調査は1973年（S48）の夏に調査した結果の報告を主とするが，案外遺物は少なく，整理は簡単であった。遺物から推論すれば，縄文時代早期末と，此のあたりで土師器が盛に使用された頃から平安時代初期の土師器がなくなるころの三期であるが，二個の土師器竪穴を発掘して，鹿角市としては有益な業績を上げることが出来たであろう。

丸館表の方形竪穴は，餅野方形竪穴より新しく，性格不明の短い溝状の遺構は，結局なんであるか，限られた路面だけの発掘では推論不能であったが，　PL－15　前年発掘の草木（丸館表の南100m）の出土遺物（PL15の14～17）よりは，丸館表の土器とほぼ同期であると考えられるが，草木においては，包含する地質が扇状地の小礫を多く混え，散在的で住居跡の形などよく探索できずわからなかった。丸館表と餅野竪穴については，鹿角市としては最初の本格的発掘であるが，他の地点一部は調査以前に工事によって破壊されて，今年度の調査は前半が干天続き，後半が雨で，調査補助員に倒れる者が多く，調査担当者さえ俄に死にかけるという状態で，調査には不充分な条件があった。

現場はいずれも宿舎の県立十和田高校大湯分校の仮宿所より遠く飲料水にも事欠き，自衛隊隊員の援助（機動力）がなければ，到底調査不可能であったろう。

参 考 文 献

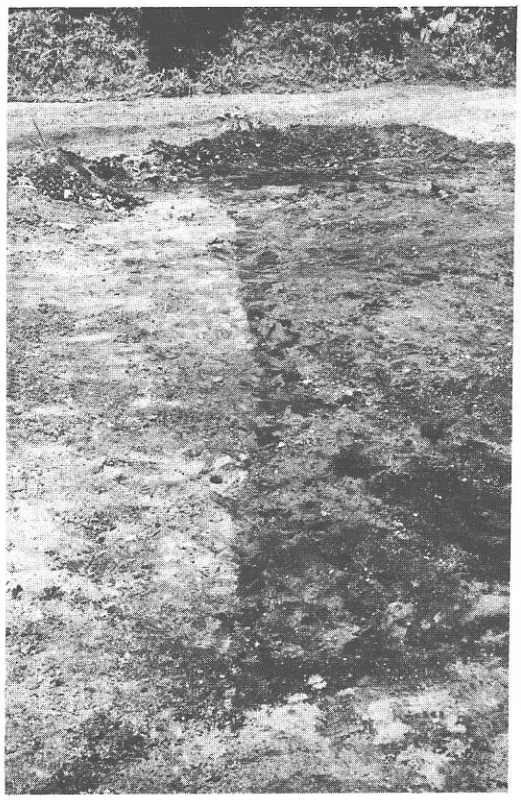
1．「大湯環状列石」文化財保護委員会Ｓ28

2．「秋田県の考古学」奈良修介・豊島昂Ｓ42

3．「大湯町竪穴報告」木村善吉，人類学雑誌45巻９号Ｓ５

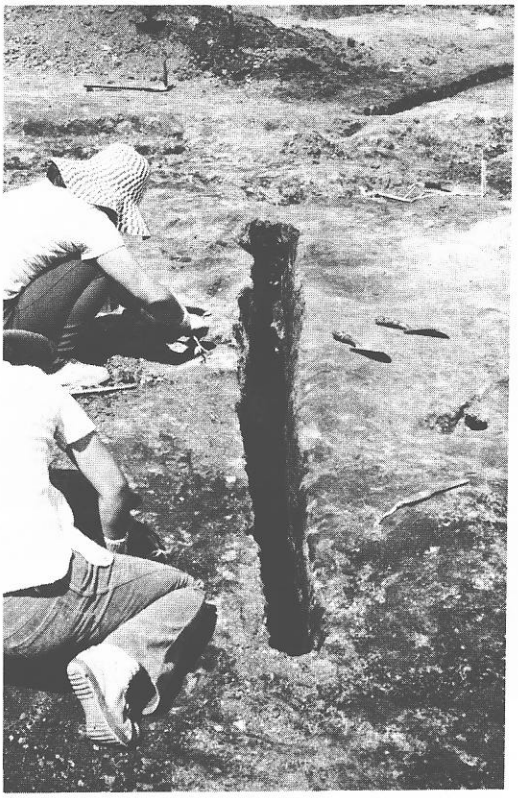
4．「神沢海岸遺跡」　和田吉之助・富樫泰時Ｓ46

5．「黒森山麓発掘報告書」　奥山潤・大黒勝蔵　十和田町教育委員会Ｓ46

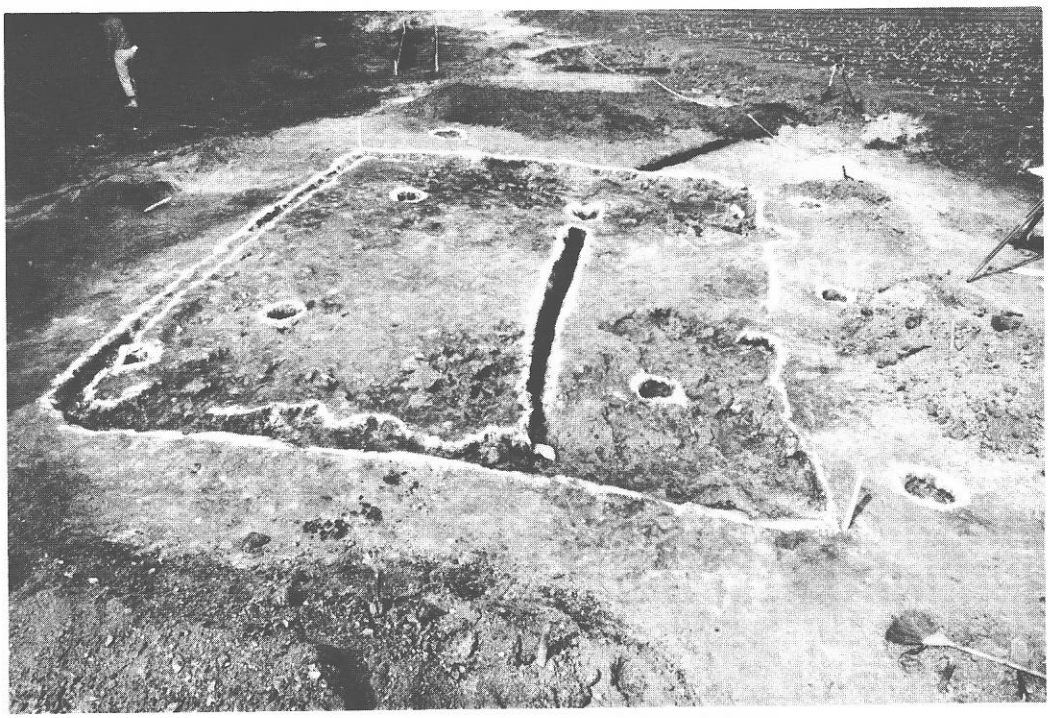


PL I　(上) 丸館表住居跡の陥込み南東より
　　(下) 丸館表住居跡南より北側路線

PL 2 (上) 住居跡内の土器出土状態
(下) 南東より北側予定路線

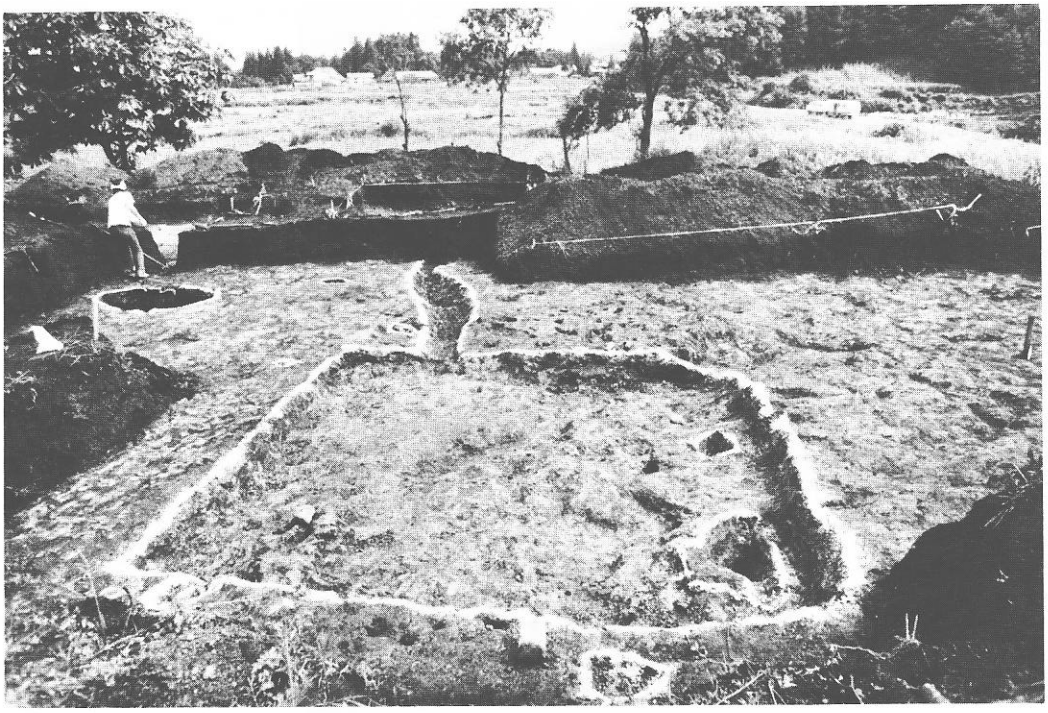


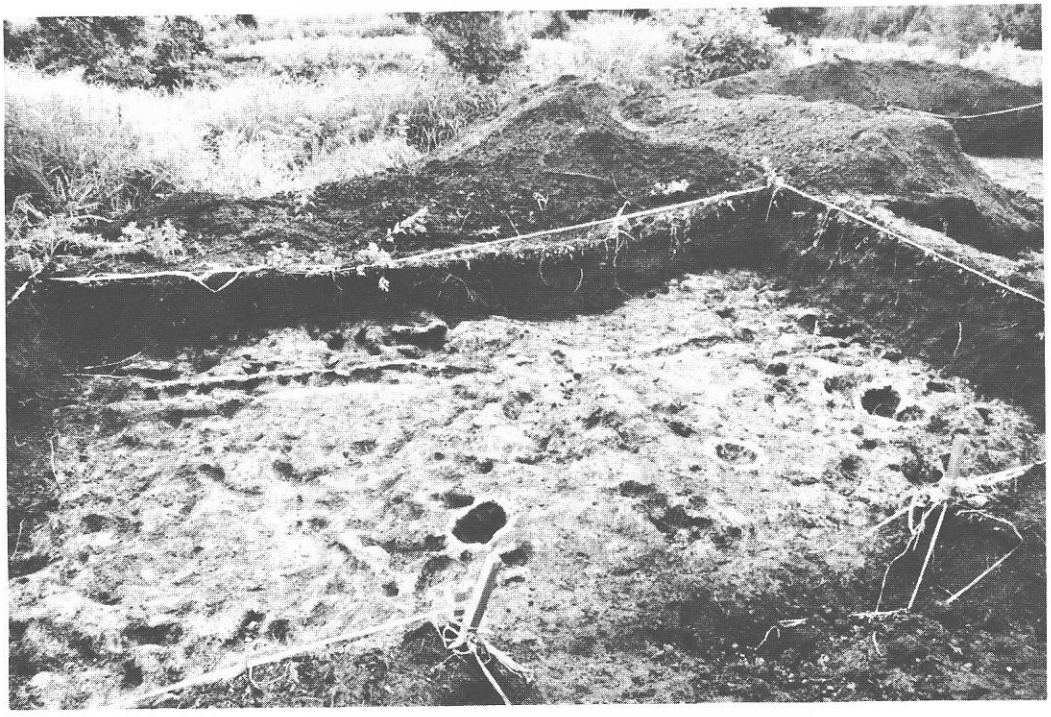
PL 3 (上) 住居跡内の③の溝
(下) 北側より南側予定路線と⑤ ⑥の溝



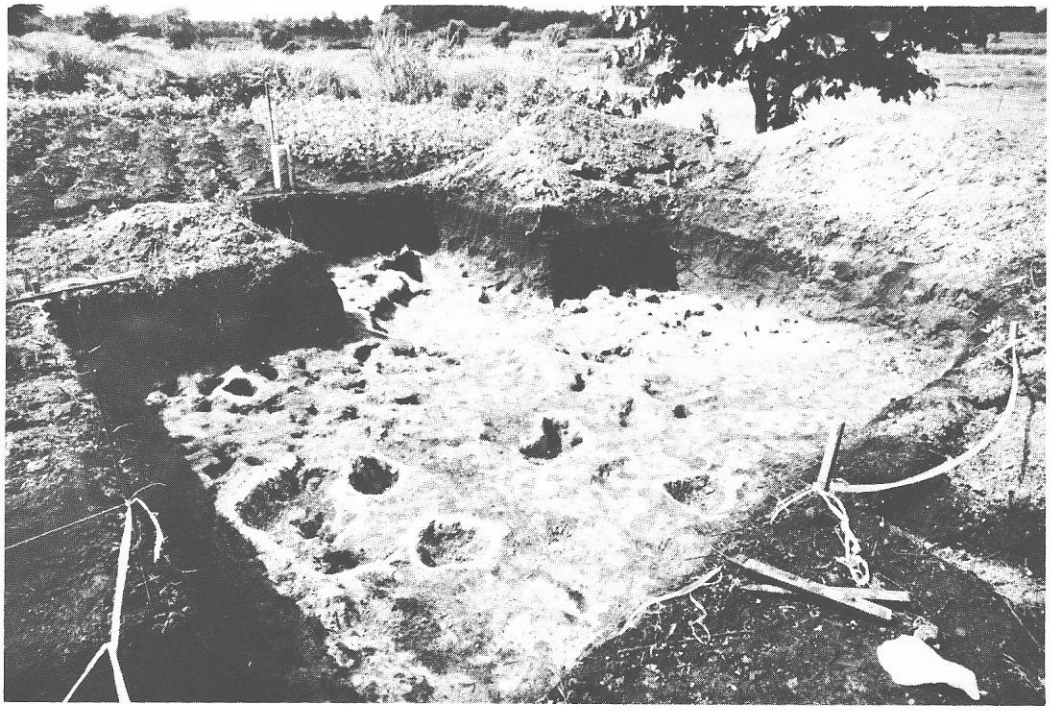
PL 4 (上) 丸館表住居跡南西より
(下) 丸館表⑥Y字状溝

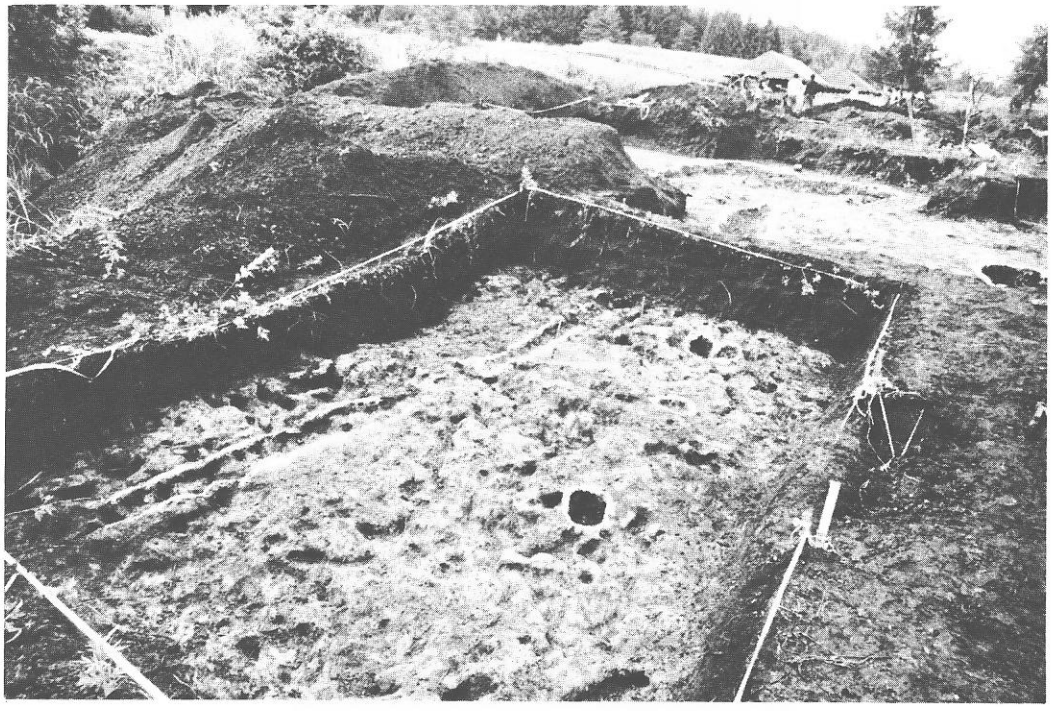
PL 5 (上) 下草木第 5 発掘地点
(下) 仝 北側の溝状の陥込み



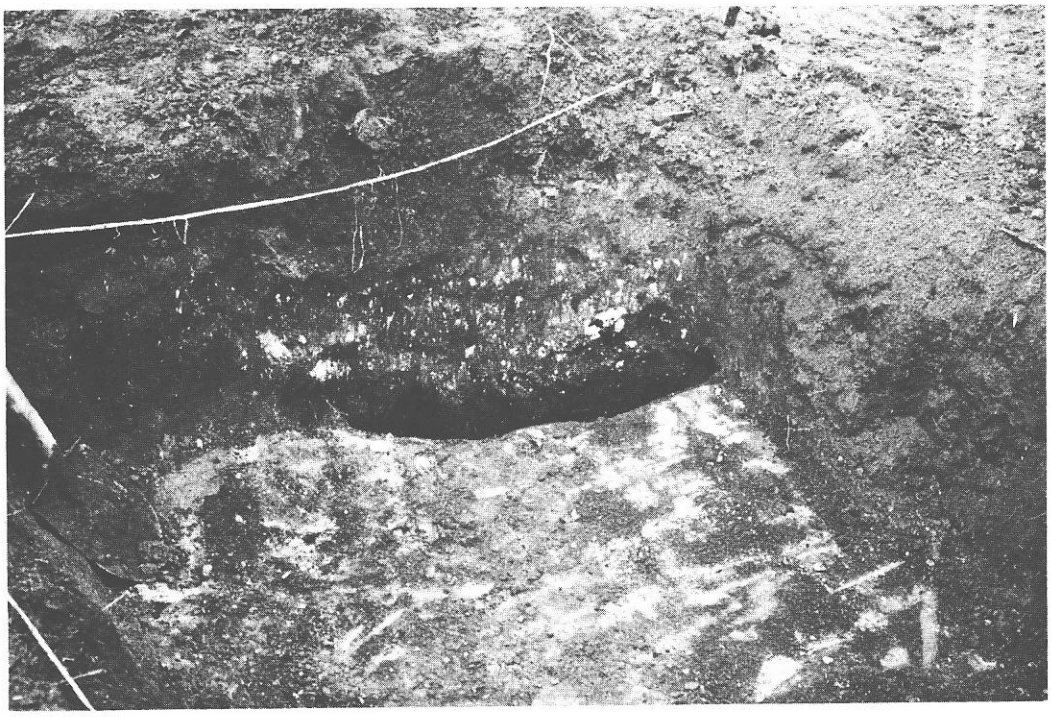


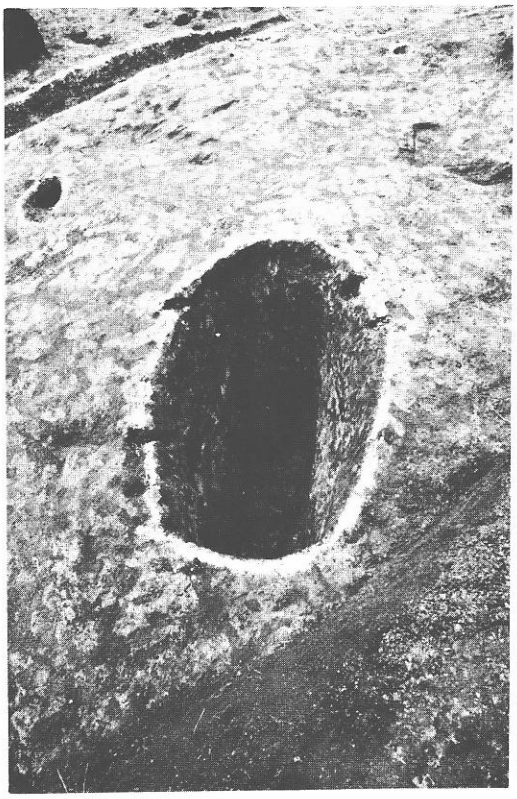
PL 6 (上) 第6地点餅野前年発掘住居跡上方は長野
(下) 餅野E 1グリッドの柱穴と溝を北より



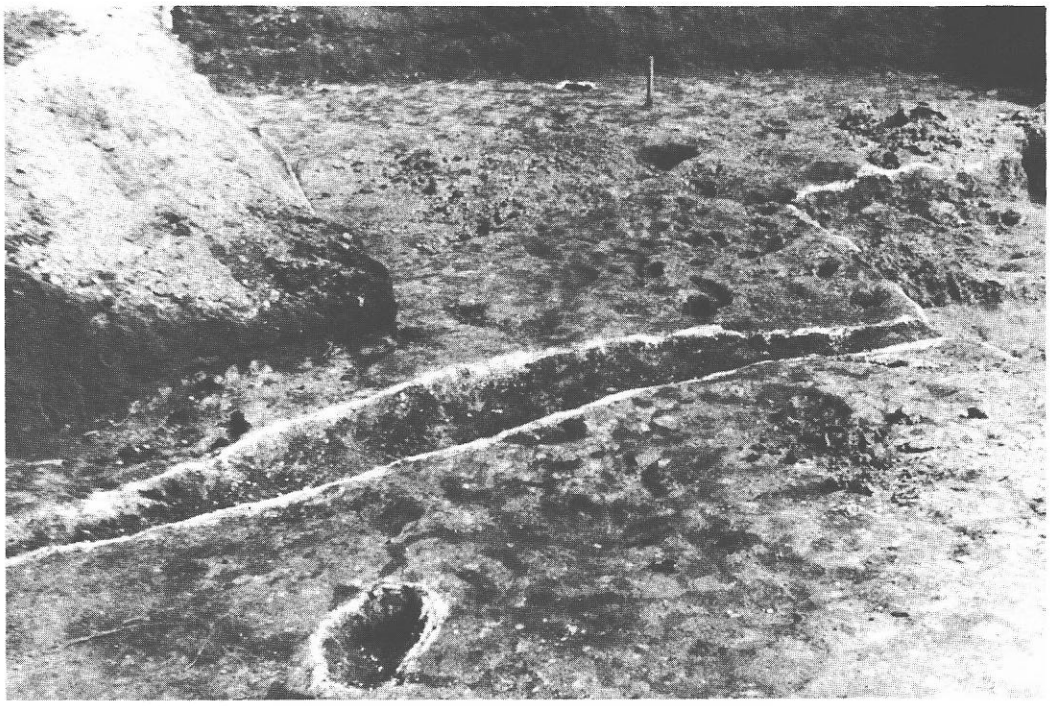


PL 7 （上）餅野W I グリッド南より
（下）餅野E I グリッド北より

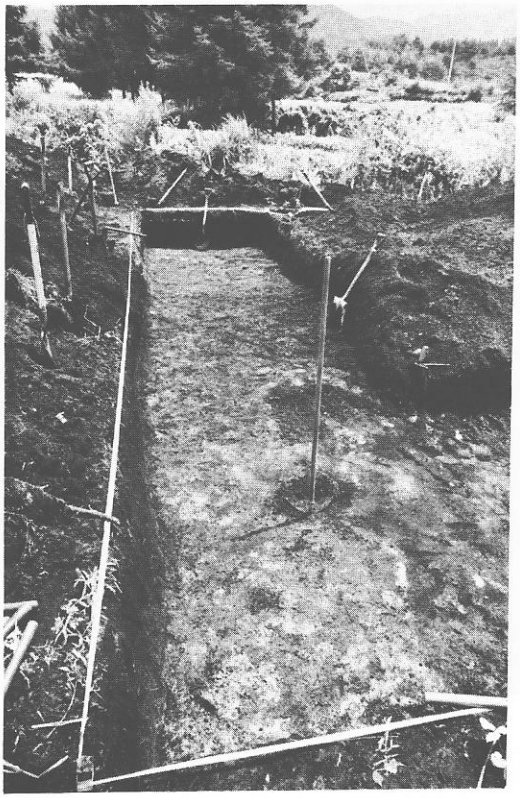


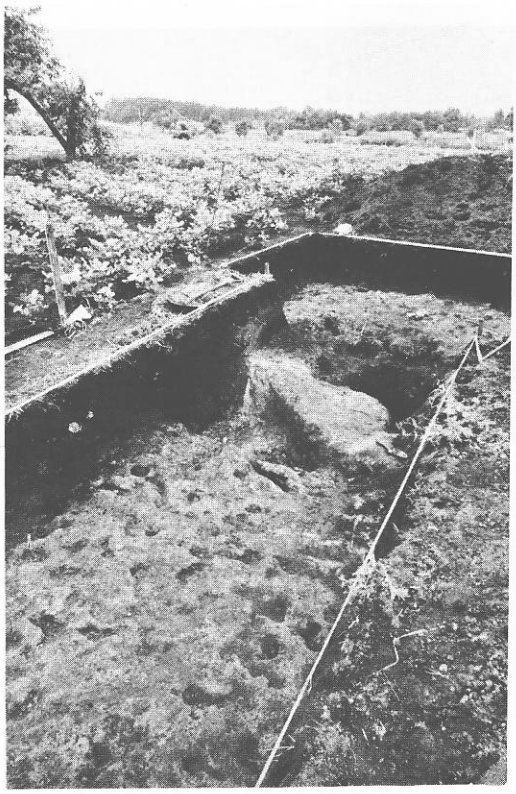


PL 8 (上) 餅野CW隅のピット出現南より
(下) 〃 ピット西より



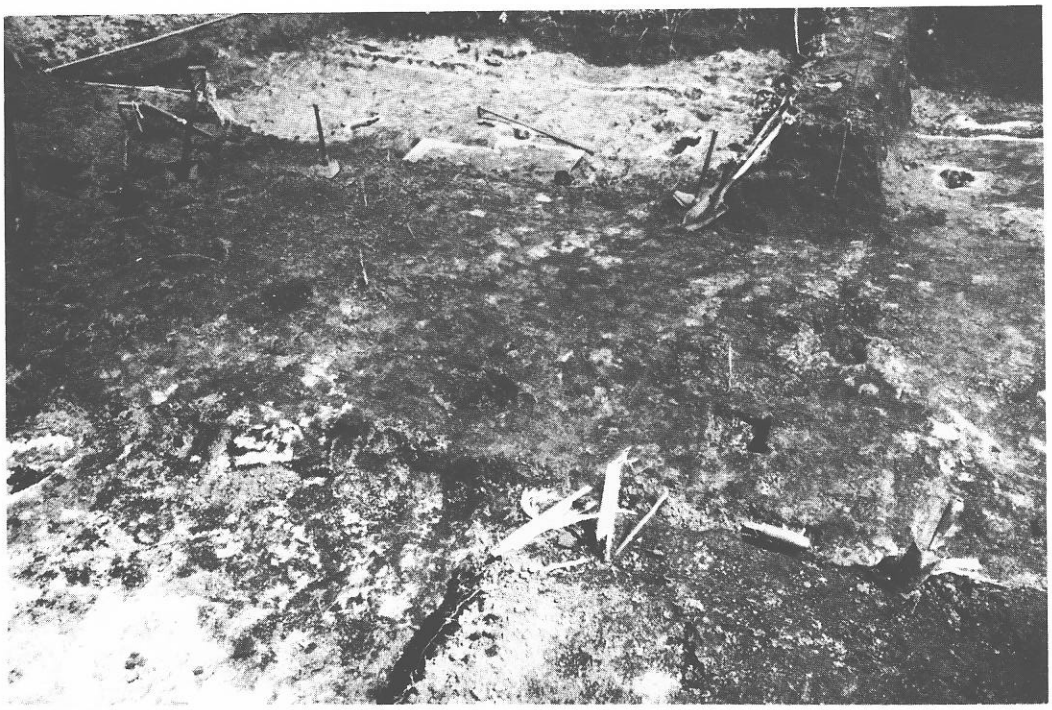
PL 9 (上) 餅野ＣＷピット発掘南より
(下) 餅野住居跡より出る溝北西より

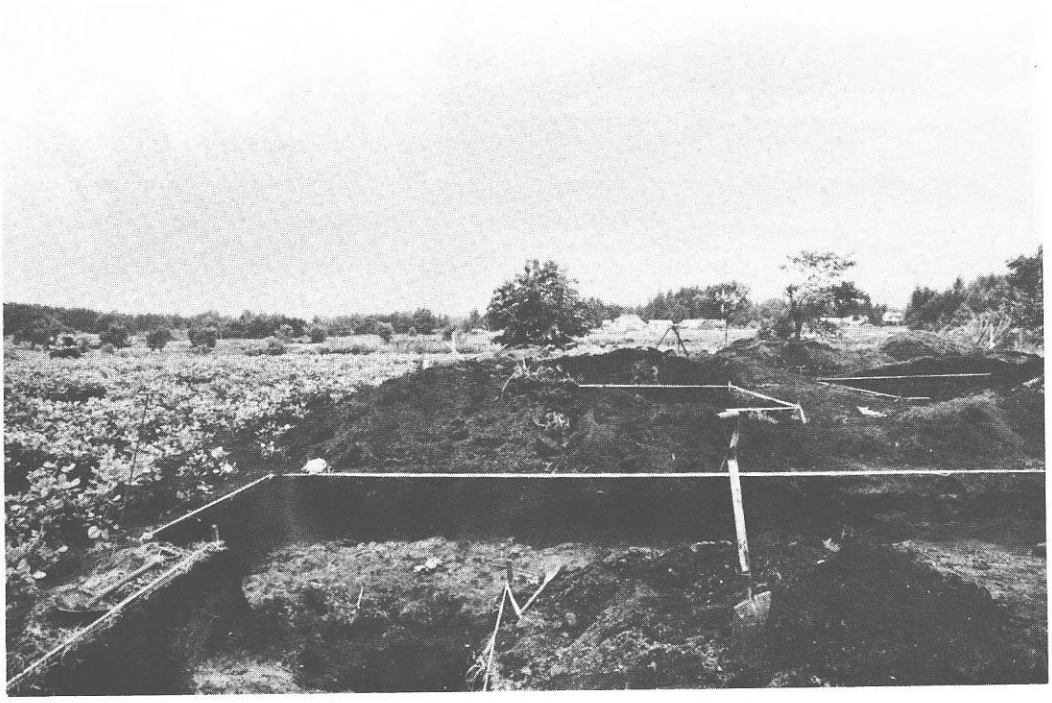




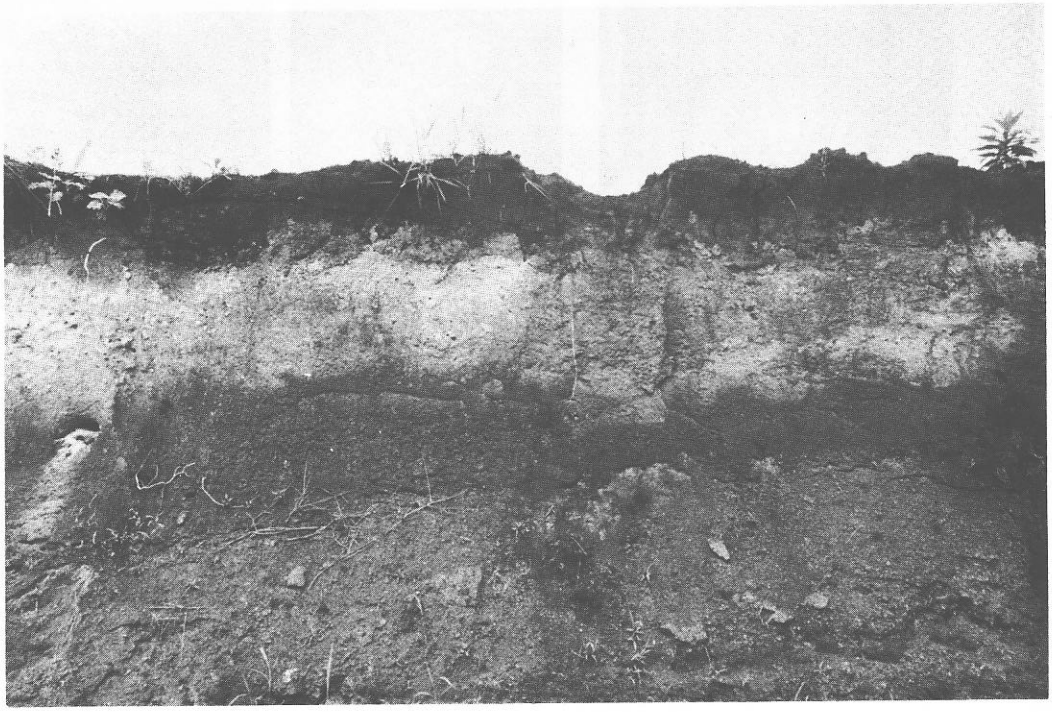
PL 10 (上) 餅野S 1・S 2ピット掘込み前西より
(下) 餅野S 1・S 2ピット南より

PL 11 (上) 餅野住居跡より出る溝北東より
(下) 餅野CWのピットと住居跡

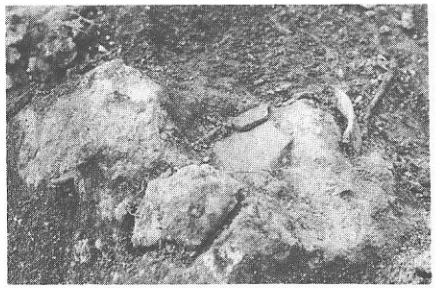




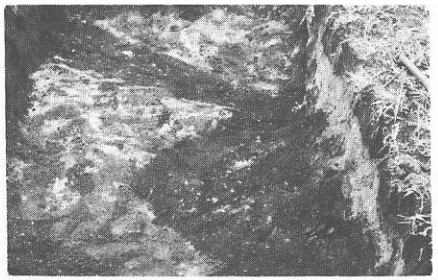
PL 12 (上) 餅野E 1 ・W 1 グリッドのアゼ取除き西より
(下) 餅野発掘現場より長野をのぞむ南より



PL 13 (上) 餅野南方予定路線切通し北より土層面
(下) 仝　切通しにあるピット断面東より



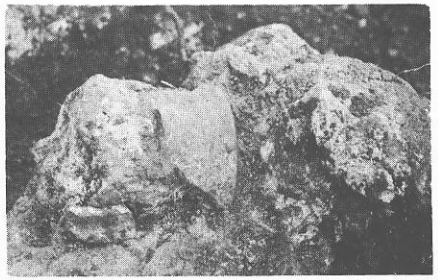
5



3

1

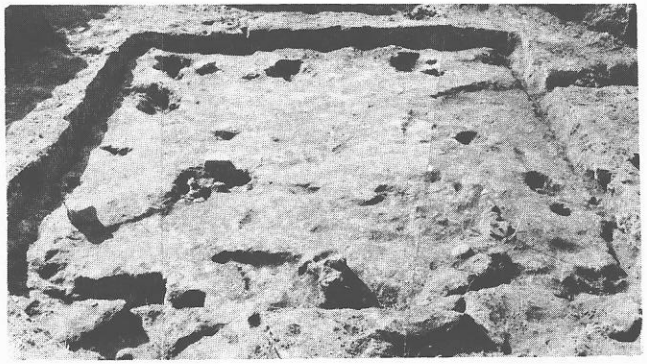
6



4

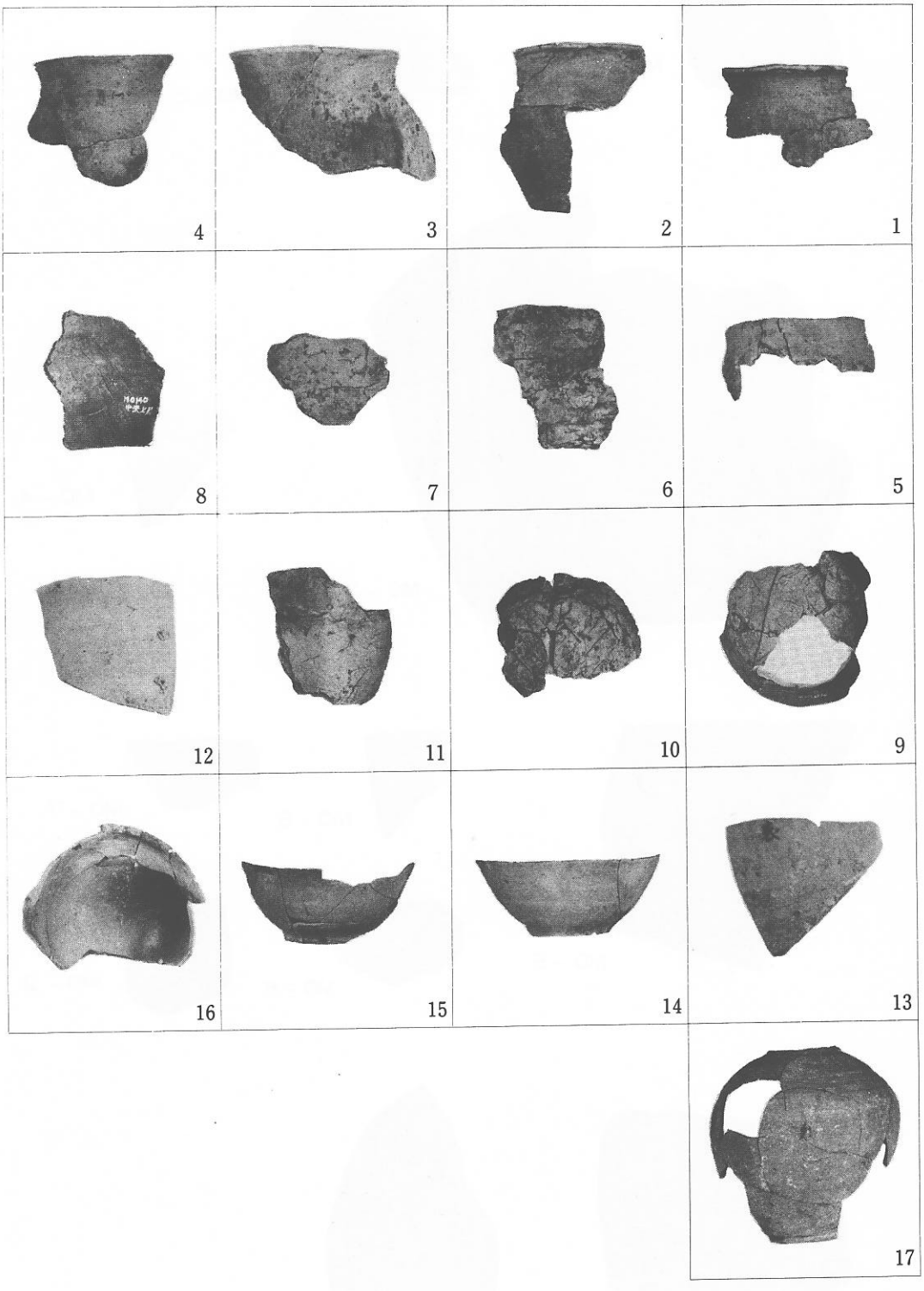
2

8

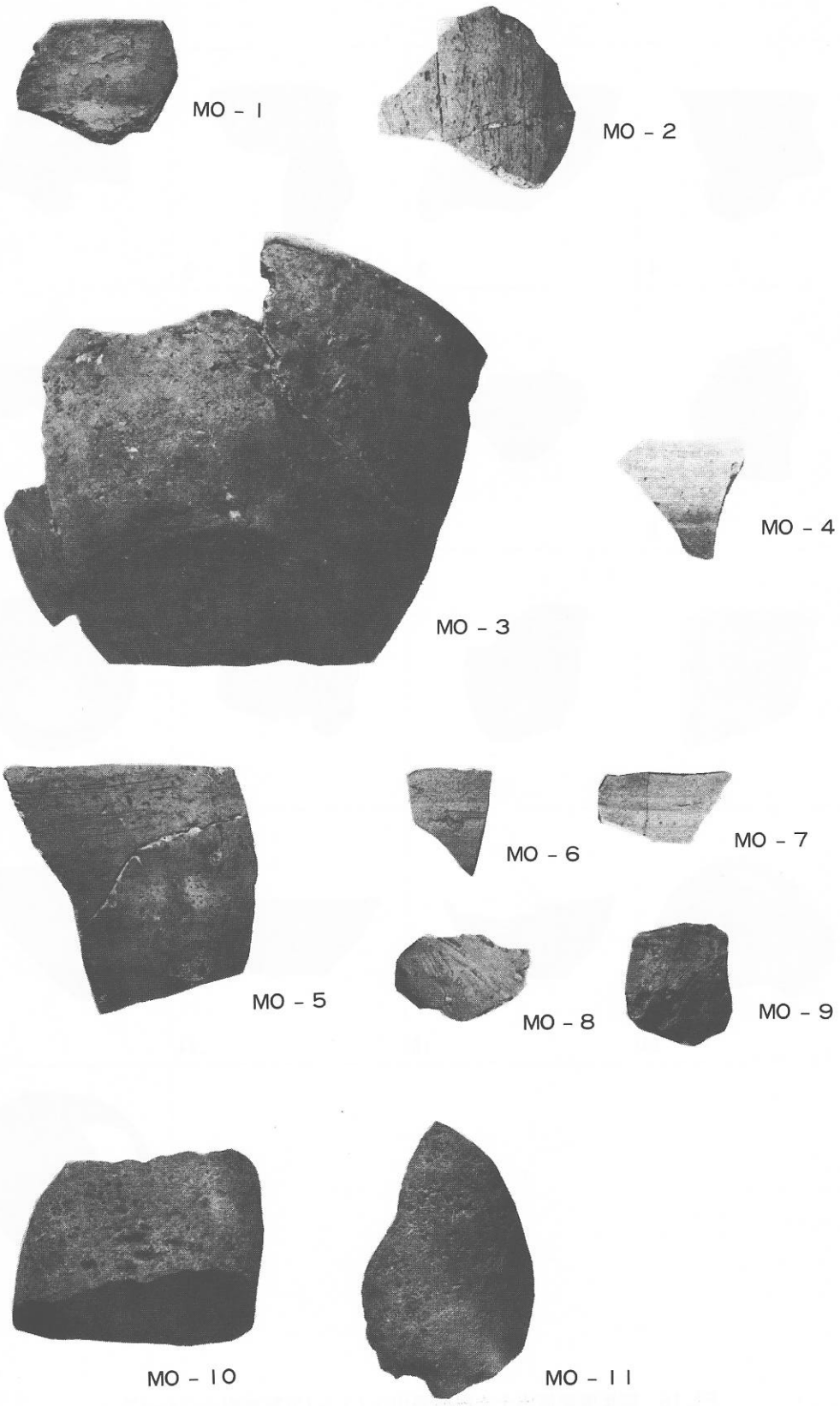


7

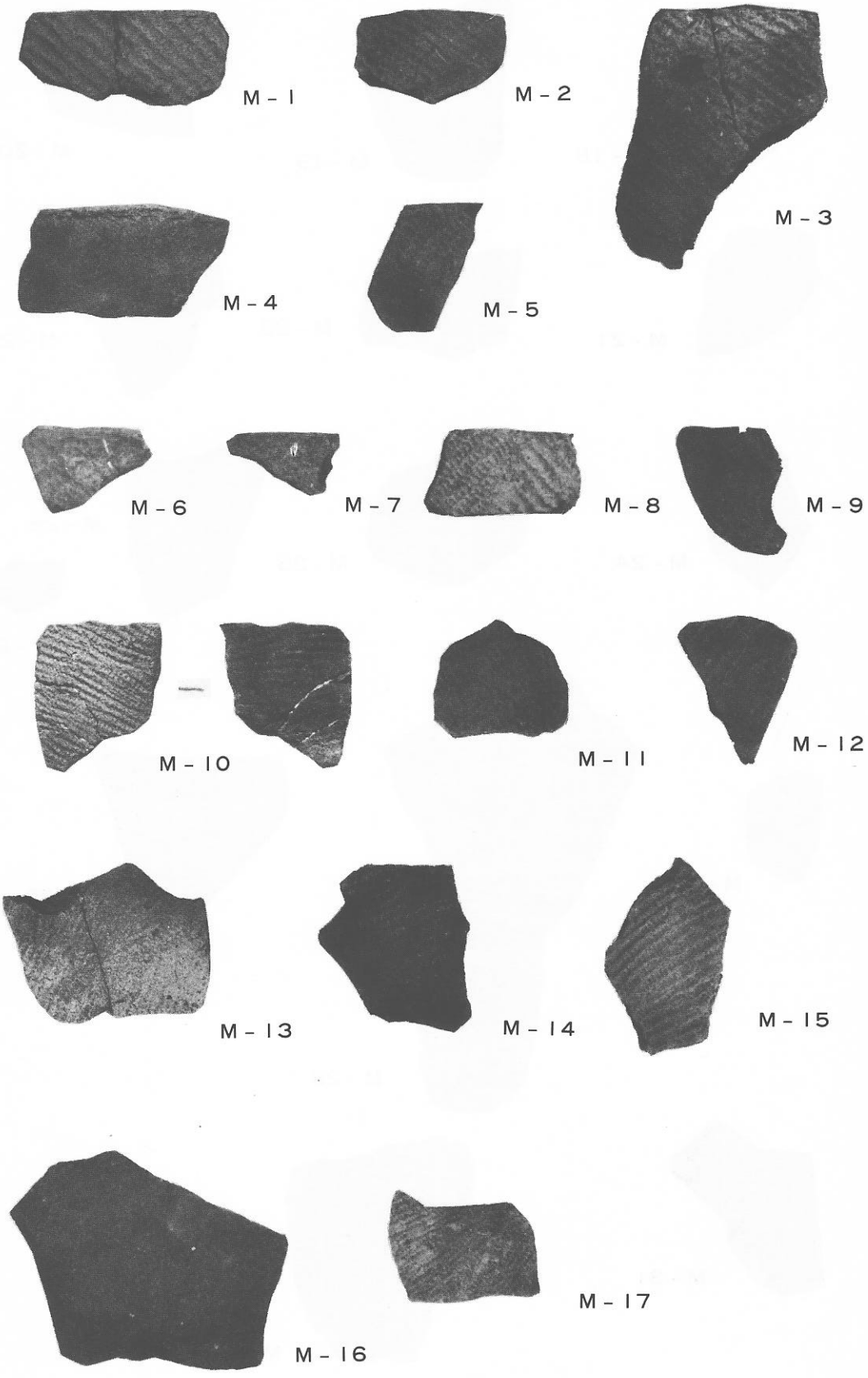
PL 14　餅野C グリッドの昨年発掘の土師器住居跡の内部
及び集辺の状況



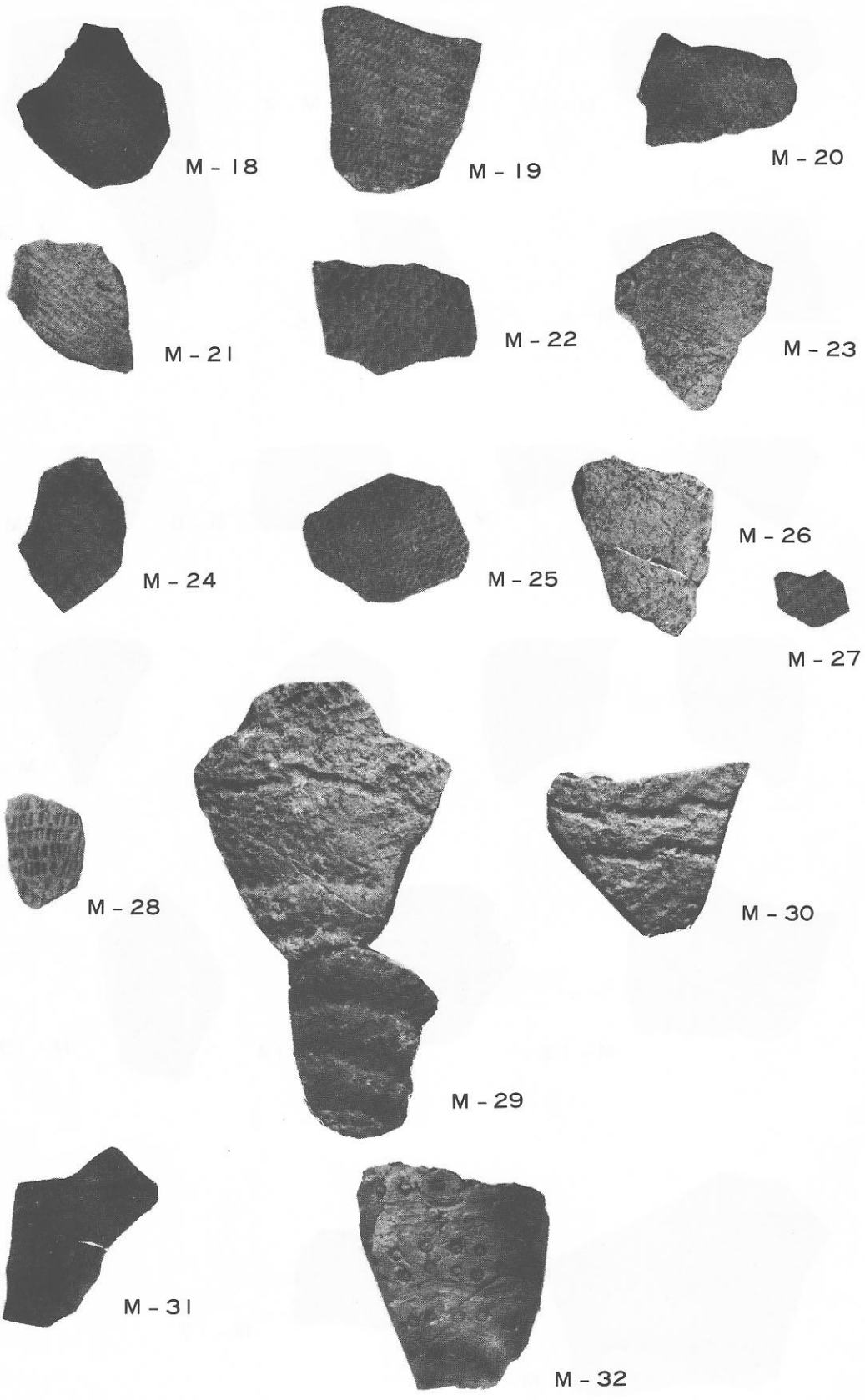
PL 15　前年度発掘出土土器餅野出土(1～13)草木出土(14～17)



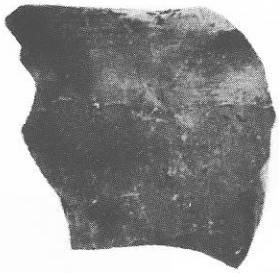
PL 16 丸館表遺跡出土土師器・須恵器（MO - 1～MO - 9）
〃 凹　石（MO - 10～MO - 11）



PL 17　餅野遺跡出土土器（M - 1 ～M - 17）

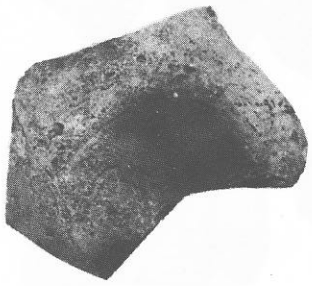


PL 18　餅野遺跡出土土器（M - 18～M - 32）

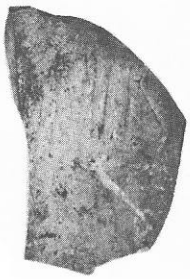


M－1

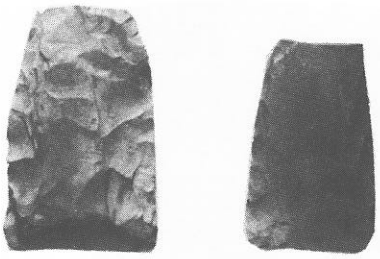
M－2



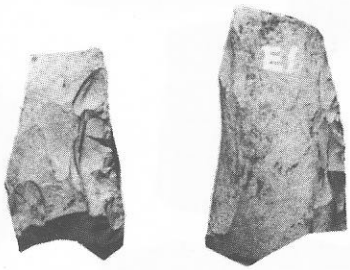
M－3



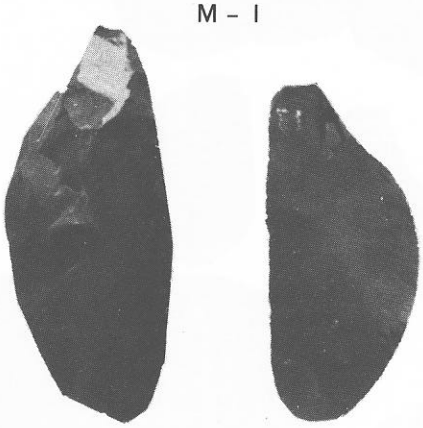
M－4



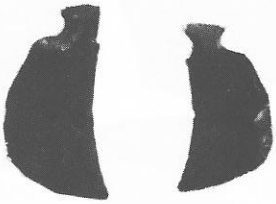
M－1



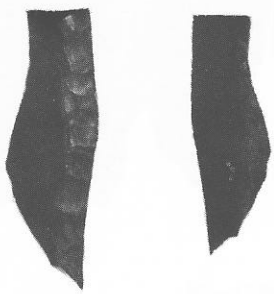
M－2



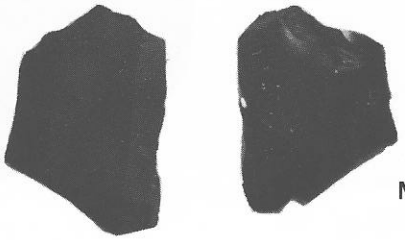
M－3



M－4

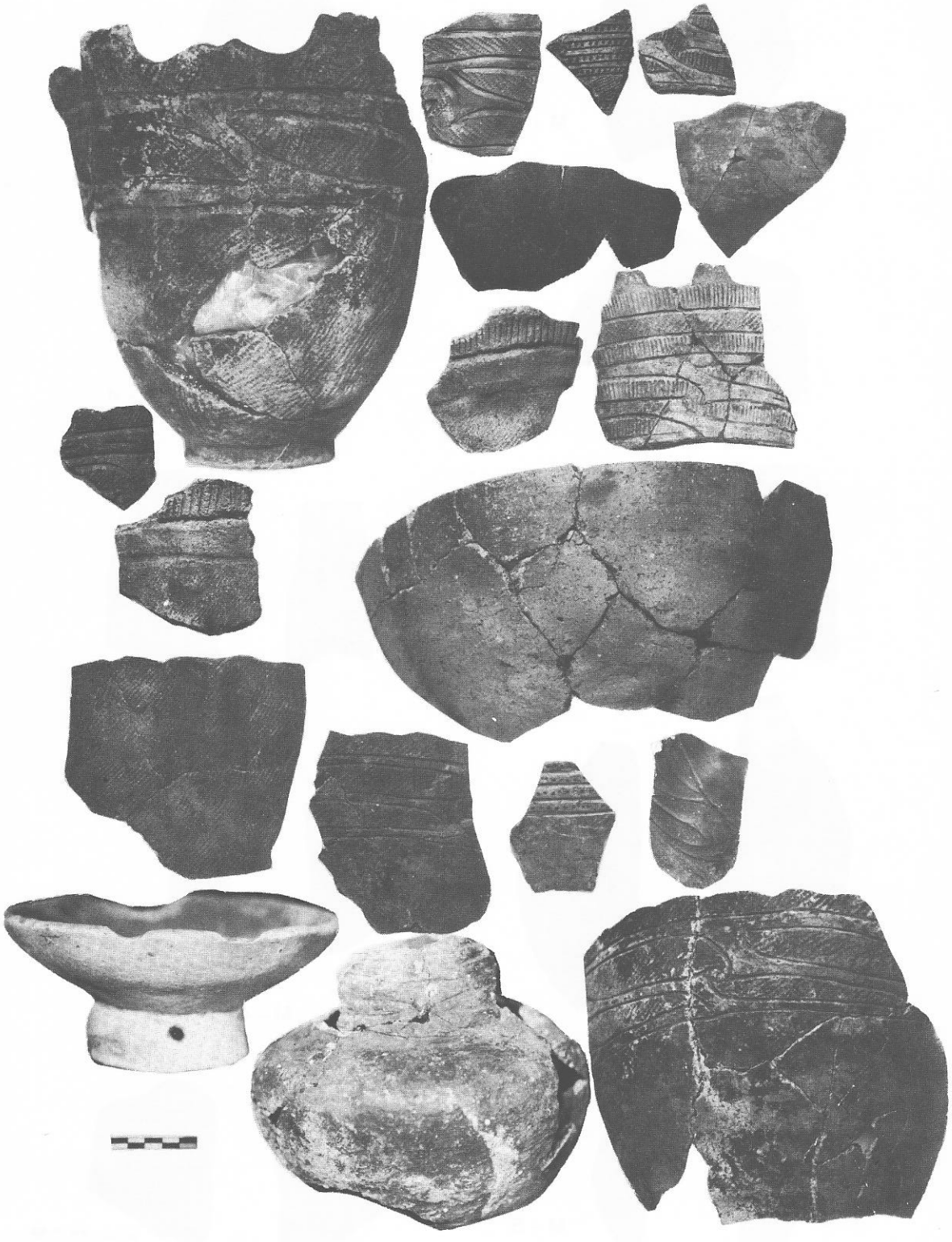


M－5



M－6

PL 19　(上) 餅野出土の土師器・須恵器 (M－1～M－4)
(下) 餅野出土の石器 (M－1～M－6)



PL 20　調査後発掘の宮戸式後半期の土器の一部